

道祖ノ本遺跡

2008

財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

どう そ の もと い せき
道祖ノ本遺跡

2008

財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

序

柳井市は古くから海上交通の要所として栄えた町です。そのため各所に多くの遺跡が点在し、琴石山の南山麓には国指定の茶臼山古墳があります。また、中世から近世にかけては商都として発展し、今でも当時の町屋の様子をうかがうことができます。

本書は、柳井市柳井に所在する道祖ノ本遺跡について、山口県田布施農林事務所から委託を受けて、山口県ひとつくり財団が実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、近世を中心とした多くの遺構が見つかるとともに、陶磁器や寛永通宝など江戸時代の遺物が多数出土し、当時の人々の生活や文化の実態を知るための貴重な資料を得ることができました。

調査記録を収録した本書が、埋蔵文化財に対する理解を深め、学術研究のための資料や郷土史を学ぶための教材として、広く活用されることを期待するものであります。

最後に、発掘調査の実施並びに報告書の作成に当たって御協力をいただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

財団法人 山口県ひとつくり財団
理事長 瀧井 勇

例 言

- 1 本書は平成19年度に実施した道祖ノ本遺跡（山口県柳井市柳井）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は広域営農団地農道整備事業（柳井大畠地区）に伴い、財団法人山口県ひとつくり財団が山口県田布施農林事務所の委託を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター
調査担当 文化財専門員 籠山幸雄
調査研究員 小南裕一

- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、柳井市教育委員会、山口県田布施農林事務所及び地元関係各位から、協力・援助を得た。
- 5 図1は国土地理院発行の5万分の1地形図「柳井」を複製使用した。
- 6 位置及び方位は国土座標（世界測地系）で示し、標高は海拔（m）である。
- 7 土色の色調表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 8 図版中の遺物番号は実測図及び一覧表の遺物番号と対応する。
- 9 遺構略号は次のとおりである。
SK：土坑 SX：不明遺構
- 10 本書の執筆・編集は小南の協力を得て、籠山が行った。

本文目次

1	遺跡の位置と環境	1
2	調査の経緯と概要	4
3	調査の成果	6
	(1) 遺構	6
	(2) 遺物	10
4	まとめ	21
付編	道祖ノ本遺跡の土壌分析	22

挿図目次

図1	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
図2	調査区設定図	4
図3	遺構配置図	7
図4	土坑実測図①	8
図5	土坑実測図②	9
図6	埋甕実測図	9
図7	陶磁器実測図①	11
図8	陶磁器実測図②	12
図9	陶磁器実測図③	13
図10	陶磁器実測図④	14
図11	陶磁器実測図⑤	15
図12	陶磁器・土器・土製品実測図	16
図13	土製品実測図	17
図14	石製品実測図①	17
図15	五輪塔	17
図16	石製品実測図②	18
図17	金属製品・銭貨実測図	18
図18	土器実測図	21

表 目 次

表 1 出土遺物一覽①	19
表 2 出土遺物一覽②	20

図版目次

図版 1 調査区遠景	
図版 2 調査区遠景・調査区全景	
図版 3 調査区全景	
図版 4 調査区中央部	
図版 5 SK 2・SK 3・SK 7・SK 9・SK27・SK31・SK33・埋甕14・埋甕35	
図版 6 出土遺物① (遺物番号 1・2・3・4・5・6・7・8・10)	
図版 7 出土遺物② (遺物番号 9・11・12・13・14・15・16・26・27)	
図版 8 出土遺物③ (遺物番号17・18・19・20・24・25・36・37・42)	
図版 9 出土遺物④ (遺物番号28・29・30・31・32・33・38)	
図版10 出土遺物⑤ (遺物番号34・35・39・40・43・46・47・52・54・55・78)	
図版11 出土遺物⑥ (遺物番号53・56・59・60・61・62・64~70・79~87)	
図版12 出土遺物⑦ (遺物番号71・72・73・74・75・76・77・88・89)	

1 遺跡の位置と環境

道祖ノ本遺跡（1）は山口県柳井市柳井に所在する。北は琴石山（545m）・三ヶ岳（487m）が連なる山地、南は笠佐島・屋代島を浮かべる周防灘である。遺跡は琴石山から南西にのびる尾根上に位置し、今回の調査範囲は尾根上にある小丘陵の頂部から東斜面にあたる。山腹の領家古期花崗岩を基盤とする土石の供給によって形成された小丘陵で、地質は花崗岩が風化を受けたクサリ土が主体をなす。海岸からの距離は1kmに満たない臨海部ながら、調査前の標高は78～83mを測る。この地域は沈水性の海岸で平地は少なく、西方に広がる市街地や工場用地は干拓や埋め立てによって陸地化したものである。

気候は瀬戸内気候区に属し、一年を通して温暖少雨である。遺跡の南にある心光寺池は1726年に完成した灌漑用の溜池で、周囲には階段状に耕地も残る。1960年代には斜面を利用したミカン栽培がさかんに行われたが、現在は山林化しているところも多い。周防灘には好漁場が多く、海岸では半農半漁の生活を営む人々もいた。

周辺には多くの遺跡が点在し、出土した遺物からは縄文時代まで歴史を遡ることができる。

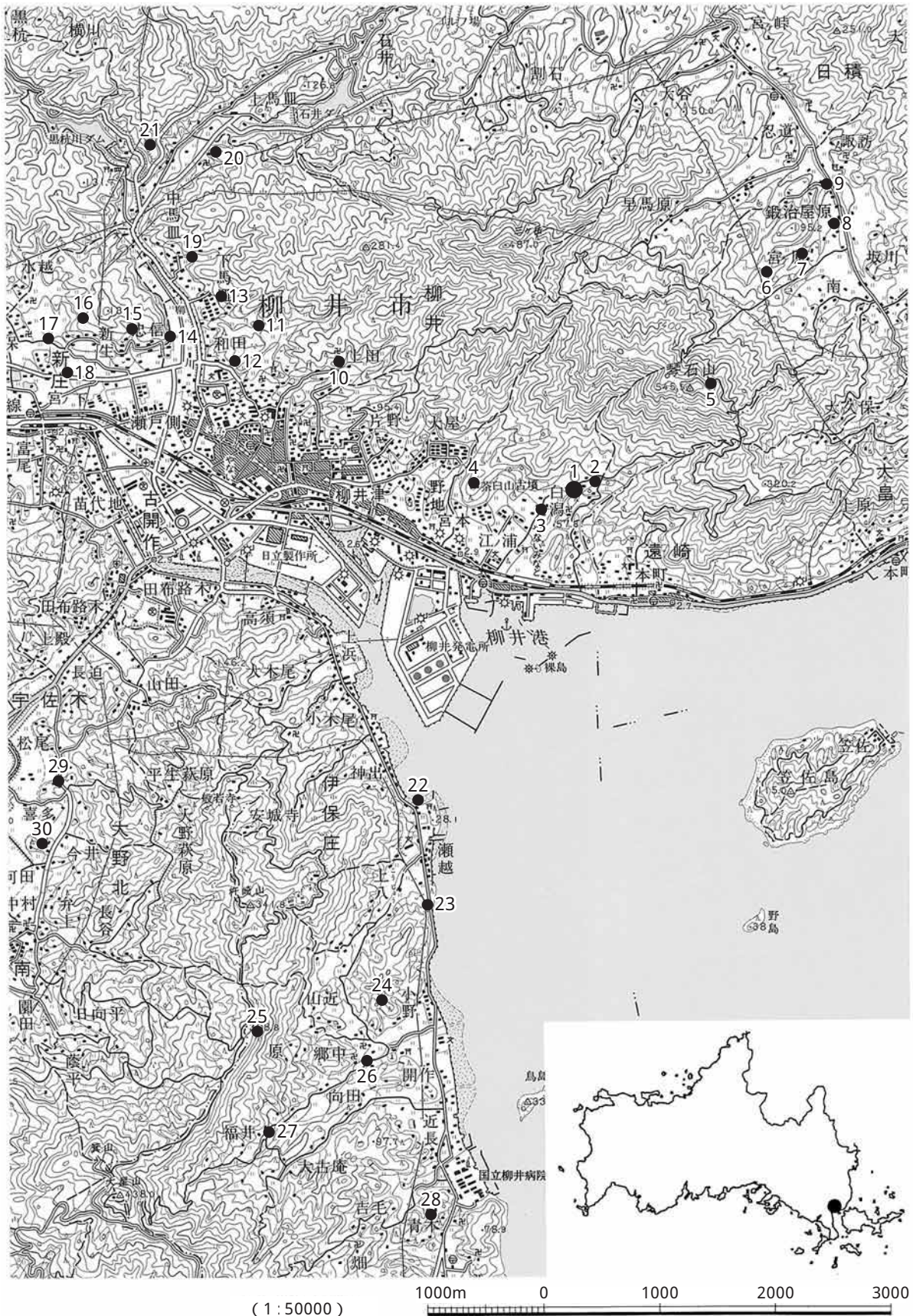
縄文時代の遺跡として黒島浜遺跡（22）があり、熊毛半島東岸に漁労を中心とした集落が存在したことが確認されている。満潮水位以下の海浜に前期から後期までの多量の土器や石器を包含しており、この地域の地盤変化の指標としても注目される。

弥生時代に入ると遺跡数が増加する。鰐淵遺跡（21）・向田遺跡（26）では前期末から中期初頭の土器が出土している。出土土器から四国伊予地方との交流もうかがえる。二丁田遺跡（30）からは中期終末の土器が出土した。三ヶ岳山麓の鳥越遺跡（11）や熊毛半島の吹越遺跡（25）は後期末の高地性集落である。吹越遺跡は標高286mの山嶺上にあり、東は安芸灘や伊予灘の諸島、西は九州まで遠望できる。農耕には不適當な立地で、武器としての鉄鏃等も出土していることから、軍事的機能をもつ集落とみられる。当時の緊張した社会状況を反映するものであろう。ここから出土した土器群は「吹越式」として山口県東部の規準資料となっている。国清遺跡（13）・山の口遺跡（16）・城力遺跡（24）・福井遺跡（27）でも後期から末期の遺物が出土している。

古墳時代前期には茶臼山古墳（4）が築造される。全長90mを測る畿内型の前方後円墳で、古墳時代の鏡として国内最大の大鏡を副葬しており、畿内勢力との同盟関係の成立を裏付ける。大段石棺（23）は中期の箱式石棺墓である。後期には多田野古墳（15）・稲荷山古墳（17）・宮畑古墳（29）が築造され、この地域が古墳時代を通して首長権力の本拠地であったことを示している。国清遺跡（13）からは土師器・須恵器が大量に出土しており、上田遺跡（10）・和田遺跡（12）も同時期の遺跡である。

古代の地方行政は国・郡・里に分けられ、中央集権体制が整えられる。周防国内の郡は大島・熊毛・都濃・佐波・吉敷の5郡であったが、721年に熊毛郡を分割し玖珂郡を設置する。これは、佐波に国府を置いて周防国支配を図る中央政権にとって、手に余るほどに成長した熊毛勢力の分断策ともみられる。やがて律令体制の崩壊とともに勢力は分散し、平安末期には荘園として楊井庄・新庄・伊保庄・由宇庄が、国衙領として余田保が存在した。

中世の遺跡も多い。行里五輪塔（3）は薬研彫りの四門梵字がそろっており、鎌倉末期の製作とみ



- 1 道祖ノ本遺跡 2 難波氏館跡 3 行里五輪塔 4 茶白山古墳 5 琴石城跡 6 正蓮寺跡
- 7 栗屋氏館跡 8 鍛冶屋原遺跡 9 杉氏館跡 10 上田遺跡 11 鳥越遺跡 12 和田遺跡 (井向遺跡)
- 13 国清遺跡 14 杉氏館跡 15 多田野古墳 16 山の口遺跡 17 稻荷山古墳 18 浜遺跡 19 新国清遺跡
- 20 法専寺遺跡 21 鱈淵遺跡 22 黒島浜遺跡 23 大段石棺 24 城力遺跡 25 吹越遺跡 26 向田遺跡
- 27 福井遺跡 28 吉毛遺跡 29 宮畑古墳 30 二丁田遺跡

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

られる。室町時代に入ると、大内氏の支配下で瀬戸内の軍事・海運の要衝として栄える。この地域を領有した杉氏は大内氏の重臣で、杉氏に関わる遺跡として、杉氏館跡（9・14）や鍛冶屋原遺跡（8）がある。鍛冶屋原遺跡には中世のスラグが広範囲に分布する。杉氏を大壇那とした八幡宮の改築に従事した鍛冶屋が住んだといわれている。その後、毛利氏の支配を受けることとなるが、毛利氏の防長侵攻を逃れて由宇から移り住んだという難波氏の館跡（2）や毛利氏八か国時代の郡代である粟屋氏の館跡（7）も残る。また、当時の軍事的緊張を示す山城の遺跡として琴石城跡（5）がある。

近世には、毛利氏の防長移封に伴って岩国藩吉川氏の所領となる。藩政時代には流通の拠点として大きく発展した。「吉川の御納戸」と呼ばれ、町屋には豪商が軒を連ねた。当時の町屋の一角は、現在では国の伝統的建造物群保存地区に選定され、「白壁の町並み」と称して多くの観光客を集めている。豪商は商品の集散だけでなく、次々と干拓を行い、地主の性格も強めていく。樋口・境開・開作・上割・中割・沖割などは干拓に由来する地名である。干拓地の拡大に伴い、町屋裏での水運は困難になり、港は沖合に移される。

中世から近世にかけての埋葬跡として、向田遺跡（26）・吉毛遺跡（28）が注目される。いずれも約100体の人骨が出土し、西瀬戸内地域の埋葬人骨の研究に貴重な資料を提供している。

現在では、埋め立て地に工場や発電所が建設され、東方の柳井港が四国松山と結ぶフェリーの発着港となっている。しかし、輸送手段が多様化し、主要幹線が奥山間地を横断する状況下で、この地域の交通上の重要性は低下しつつあるといえよう。

※（ ）内の数字は図1での遺跡番号を示す。

引用・参考文献

- 柳井市史編纂委員会『柳井市史（通史編）』 1984
柳井市史編纂委員会『柳井市史（総論編）』 1988
大畠町史編纂委員会『大畠町史』 1992
平生町史編纂委員会『平生町史』 1978
山口県教育委員会『山口県遺跡地図（第1次改訂版）』 1991
山口県史編さん委員会『山口県史（資料編・考古1）』 2000
山口県史編さん委員会『山口県史（資料編・考古2）』 2004
山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター『向田遺跡』 2000
山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター『向田遺跡Ⅱ』 2002
柳井市教育委員会『黒島浜遺跡』 1977
柳井市教育委員会『史跡柳井茶臼山古墳』 1999
柳井市埋蔵文化財調査委員会『鳥越遺跡発掘調査報告』 1997

2 調査の経緯と概要

各種開発に伴う工事から埋蔵文化財を保護するため、関係機関が事前協議を行い、現状保存が困難な遺跡については発掘調査を実施して、消失する遺跡の記録保存をしている。山口県農林水産部が進める広域営農団地農道整備事業（柳井大島地区）においても、計画路線内の埋蔵文化財の有無を確認するため、平成16年に柳井市教育委員会が試掘調査を行った。その後の路線変更により未調査部分が生じたため、埋蔵文化財の範囲を絞り込むことも合わせて、平成17年に山口県教育委員会が試掘調査を実施した。これらの調査の結果、柱穴状のピットや土坑が確認され、土器細片等の遺物も出土した。山口県教育委員会は事業主体である山口県田布施農林事務所と協議を行い、埋蔵文化財包蔵地のうち工事のため現状保存が困難な範囲1,500㎡について発掘調査を行うことが決定された。発掘調査は山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センターが委託を受け、平成19年5月から着手することとなった。



図2 調査区設定図

5月中旬から調査範囲の現況確認等を行い、周辺の小・中学校及び地域住民に安全確保のための理解と協力を要請した。5月17日に発掘作業員説明会を実施し、5月28日から現地調査を開始した。調査区は北東から南西に走る市道によって二分され、それぞれの北東部分は一段低く削平されている。この市道と段差によって四つの地区に分けて調査を進めることとした（道路部分は1地区及び4地区に含める）。最初にトレンチ調査により各地区の遺構面の状況を確認し、5月30日から重機による表土除去を行った。1地区・2地区からは石塔等の石製品が出土した。調査区北西側は標高差の大きい急斜面であるため、作業の安全確保のため落下防護柵を設置した。また、調査区全域が雑木

の混在する竹林であったため、表土除去後の人力による樹根の処理には予想以上の時間を要した。

6月中旬から遺構の検出を行った。2地区から5枚の寛永通宝、4地区の道路部分から大量の近世陶磁器が出土した。その後、国土座標杭を設置し、平板測量で遺構の配置を把握したうえで掘り込みの計画を検討した。遺構は1地区に集中しており、掘り込み作業には大きな困難はないものとみられたが、掘り込みの過程で1地区南東側に大量の残土が確認されたため、人力による残土除去及び遺構の再検出を行った。なお、1地区南端部は遺構面の落ち込みが大きく周辺の遺構密度が極めて低いことから、トレンチ調査より土層の確認を行うこととした。2地区及び4地区は竹林になる前には畑地として利用されており、近・現代の攪乱を受けて遺存状態は良くない。3地区では樹根に遮られて遺構はほとんど検出されなかった。また、この時期には梅雨や台風の影響で作業員を動員できない日も多かった。

7月中旬以降の掘り込み作業は順調に進んだ。多くの遺構が浅く、出土遺物も少量であったため、短期間で終了した。1地区では墓坑とみられる土坑が検出されたが、上部は後世の削平を受けて消失したとみられ、墓と特定できる遺物も出土しなかった。埋甕2基も底部しか残存しておらず、周辺では重機による攪乱が確認された。8月上旬にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。撮影後にグリッド実測により遺跡全体の記録をとり、下層遺構の確認等を行い、8月23日に現地調査は終了した。最後に調査区の埋め戻し及び安全対策を施し、山口県田布施農林事務所による現地での検査を受け、8月30日に現地調査事務所を撤去した。

その後、山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料の整理、出土遺物の復元・実測・写真撮影等を行い、本報告書を刊行した。無事に現地調査を終え、報告書を刊行するに至ったのは、関係各位の多大な御理解・御協力の賜であり、ここに感謝の意を表したい。



調査前



表土除去



遺構の検出



遺構の掘り込み



空中写真撮影

3 調査の成果

(1) 遺構

調査区は東向きの緩斜面で、調査前は雑木の混在する竹林であった。表土除去の過程で、斜面を階段状に削平し、部分的に石垣を築いて高上げしていたことが判明した。平坦地を広げ、耕地として利用していた時期があったとみられる。さらに頂部の台状の地形は、近隣の堰堤工事で生じた土砂を廃棄したものであることも確認された。土坑約70基、埋甕2基を検出したが、いずれも後世の開発により上部が消失しており、遺存状況は良くない。共伴遺物も少なく、遺構の時期を特定しにくい。近世以降のものと推測される。

① 土坑

12基の土坑について概要を述べる。なお、埋土はいずれも単層であり、人為的に埋め戻したか廃棄後に急速に堆積したものとみられる。遺構面の地山は赤褐色（5 YR 4/8）から明赤褐色（2.5YR 5/8）を呈する粘質土である。

SK 1（図4）

長軸95cm、短軸75cmの不整な隅丸長方形。底面は平坦であるが、最深部でも15cmに満たない。埋土は褐色粘質土（7.5YR 4/4）。染付碗が出土した。

SK 2（図4、図版5）

長軸135cm、短軸100cmの隅丸長方形。底面は平坦で、深さは20cm。埋土は褐色粘質土（7.5YR 4/6）で地山ブロックを含む。形状から墓の可能性が示唆される。

SK 3（図4、図版5）

長軸155cm、短軸115cmの不整な隅丸長方形。底面は平坦で、深さは25cm。埋土は褐色粘質土（7.5YR 4/4）で地山ブロックを含む。

SK 7（図4、図版5）

長軸140cm、短軸115cmの長方形に整えられており、底面も平坦である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、深さは25cm。埋土は赤褐色粘質土（5 YR 4/6）で地山ブロックを含む。形状から墓の可能性が示唆される。

SK 9（図4、図版5）

長軸135cm、短軸115cmの隅丸長方形。底面は起伏が激しく、特に中央部が窪んでいる。中央部の深さは40cm。埋土は褐色粘質土（10YR 4/4）。墓とみなしたSK 2及びSK 7と規模や軸方向がほぼ同じであるが、底面の形状が大きく異なる。埋土のリン酸・カルシウム分析を行った結果、遺体を埋納した可能性は低いことが判明した。素焼きの管状土錘が出土しており、廃棄土坑とみられる。

SK10（図4）

長径125cm、短径75cmの楕円形。深さは20cm。底面に浅い楕円形のピットがある。埋土は褐色粘質土（10YR 4/4）で地山ブロックを含む。

SK18（図4）

長径115cm、短径90cmの不整楕円形。底面には2つの窪みがあり、最深部の深さは30cm。埋土は褐色粘質土（7.5YR 4/4）。

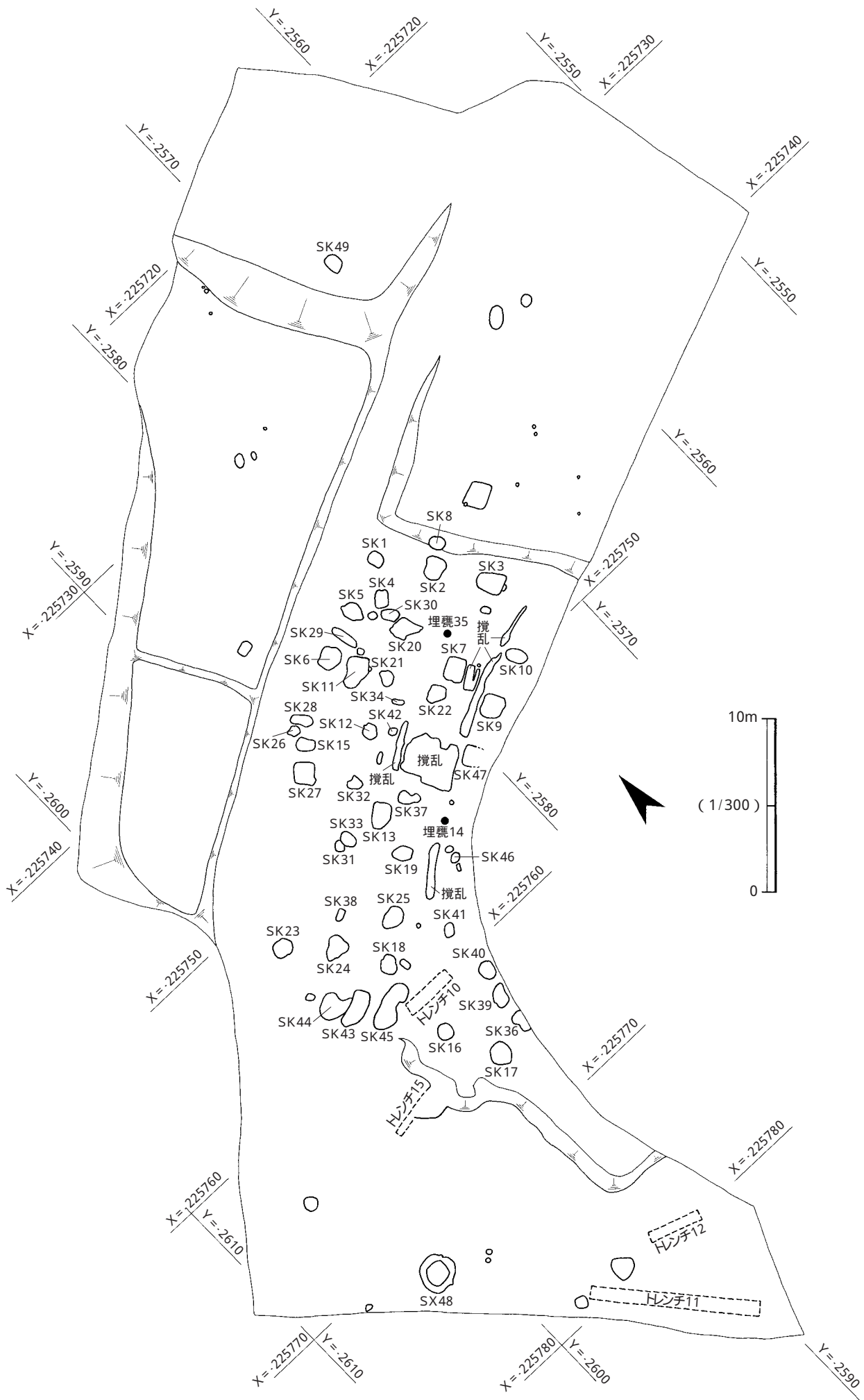


図3 遺構配置図

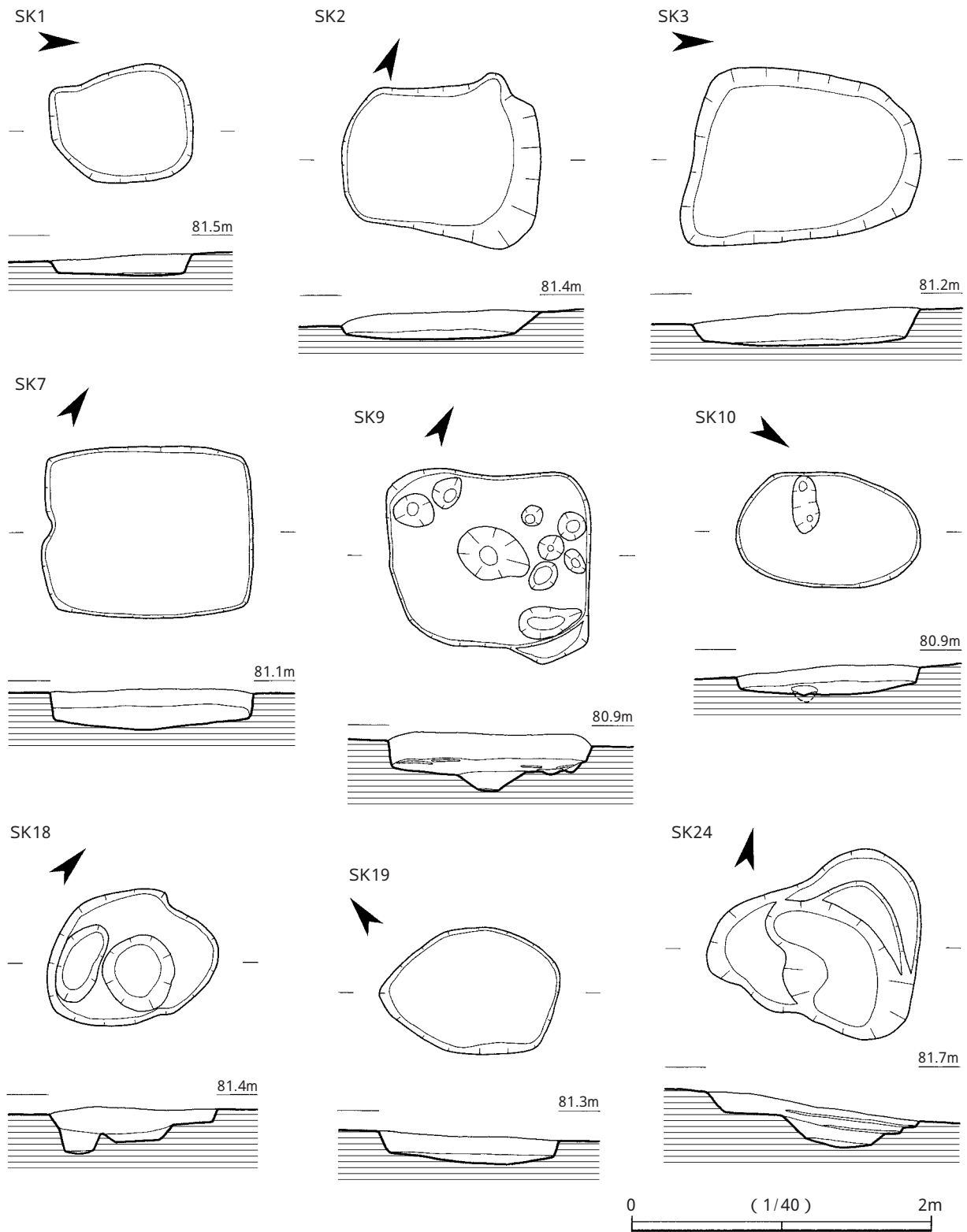


図4 土坑実測図①

SK19 (図4)

長径120cm、短径85cmの楕円形で、底面は平坦。深さは15cm。埋土は褐色粘質土 (7.5YR 4/4)。

SK24 (図4)

不整形で最大幅は150cmを測る。底面が階段状になっており、最深部の深さは30cm。埋土は褐色粘質土 (7.5YR 4/6)。煙管の雁首が出土した。

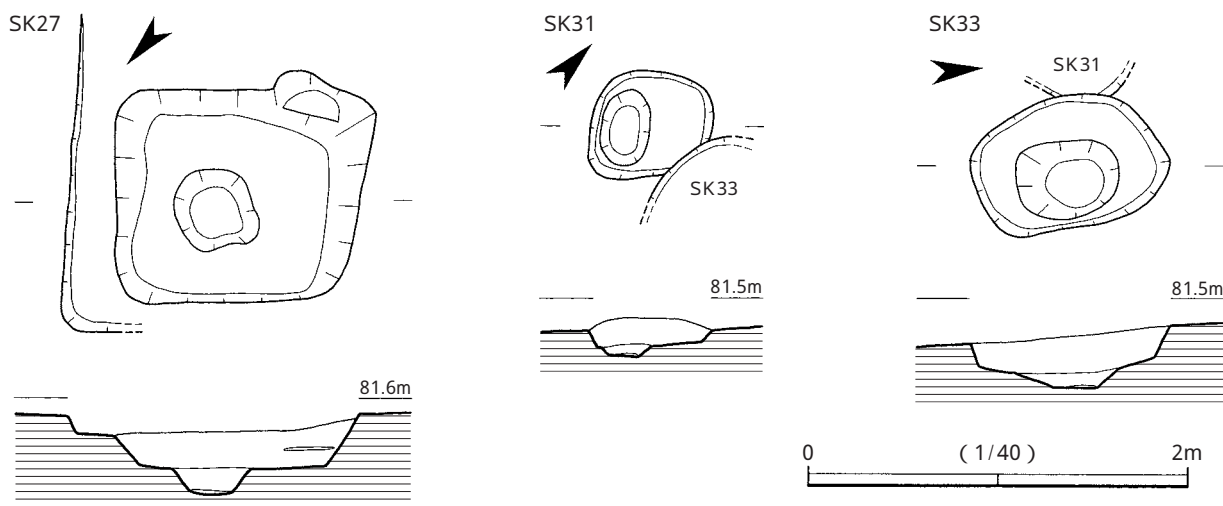


図5 土坑実測図②

SK27 (図5、図版5)

長軸130cm、短軸115cmの隅丸長方形で、底面中央が窪んでいる。壁面は緩やかに立ち上がり、中央部の深さは40cm。埋土は褐色粘質土(10YR 4/6)。平成17年の試掘調査で検出された土坑で、このとき埋土から土器片及び鉄釘片が出土している。今回の調査では同様の遺物は出土しなかったが、形状から墓の可能性が高いとみられる。

SK31 (図5、図版5)

長軸65cm、短軸55cmの隅丸長方形を呈する小土坑。底部に窪みがあり、最深部の深さは20cm。埋土は褐色粘質土(7.5YR 4/4)。SK33に切られる。

SK33 (図5、図版5)

長軸95cm、短軸70cmの隅丸長方形で、底部中央が窪む。中央部の深さは30cm。埋土は褐色粘質土(7.5YR 4/4)。SK31を切る。

② 埋甕

2基とも埋土から寄生虫卵は検出されず、内面に石灰分の付着も認められないため、便槽として使用されたものではない。

埋甕14 (図6・図版5)

近世土師器の底部のみ残存。用途は不明であるが、埋土のリン酸・カルシウム分析の結果から、棺として遺体を収納した可能性は低い。

埋甕35 (図6・図版5)

近世土師器の底部のみ残存。埋土の花粉分析の結果から、ソバ栽培に関連する畑の水溜として利用されたものと推測される。

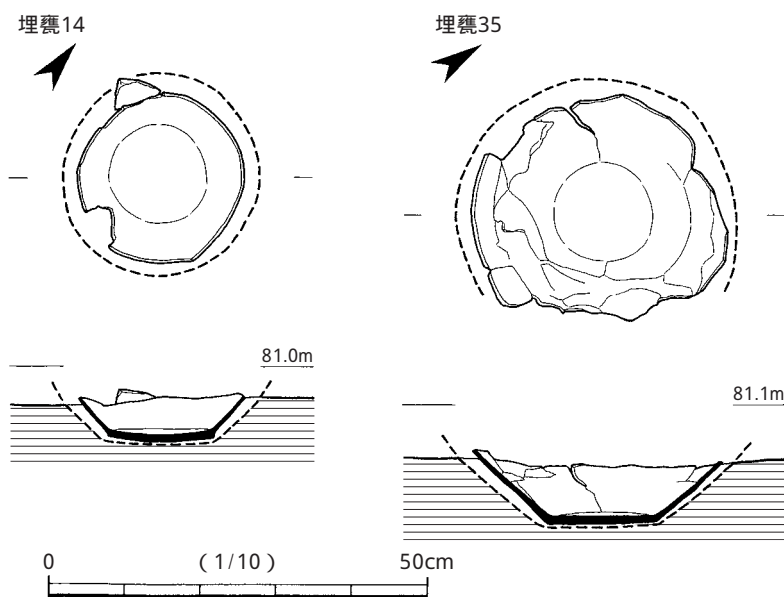


図6 埋甕実測図

(2) 遺物

陶磁器・土器・土製品・石製品・金属製品・銭貨等が出土した。最も出土量の多いのは近世陶磁器である。遺構に伴う遺物はわずかで、大部分は表土除去から遺構検出までの過程で出土しているため、ここでは遺構ごとではなく、遺物の種類ごとに概要を述べる。出土場所等については出土遺物一覧(表1・2)に掲載した。

① 陶磁器・土器・土製品(図7～13、図版6～11)

1～42は磁器、43～51は陶器、52は窯道具、53～58は陶器、59・60は土師器、61・62は瓦質土器、63は瓦である。

1は牡丹唐草文の丸碗。口縁内面に四方襷文を巡らし、見込みにコンニャク印判で五弁花を押す。高台内に銘があるが、判読は難しい。2の碗は高台脇から口縁にかけて直線状に立ち上がる。見込みにはコンニャク印判、口縁内面には四方襷文を巡らす。外面に文様がないのは青磁釉の発色不良の可能性もある。3・4は高い高台をもつ広東碗。口径に対する高台径の割合が大きく、口縁にかけて直線的に開く。中国磁器の影響を受け、18世紀末から19世紀前半にかけて肥前・有田窯で焼かれ、各地の磁器窯に広まったものである。5は二重格子文の丸碗。見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。6は外面に青磁釉を施した染付碗。内面に四方襷文を巡らし、見込みにはコンニャク印判で五弁花を押す。高台脇から口縁にかけて直線状に開く。18世紀前半の製品か。7は木賊文の丸碗。見込みにコンニャク印判の五弁花。8は流水文の丸碗。口縁内面に格子文を巡らし、見込みに流水文を配す。焼成が甘く、透明釉の釉変不良で刷毛目状に白濁している。口縁部がやや外反する。9は外面に青磁釉を施した丸碗。内面に四方襷文を巡らし、見込みに手描き五弁花。熔着痕が残る。18世紀前半の製品。10は梅花文の丸碗。11は山水文に船が描かれた広東碗。12は山水文の丸碗。見込みには岩と水を描く。13は二重網目文の平碗。見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。14は丸文の丸碗。見込みにコンニャク印判で五弁花を押す。15は横線文と草花文を施す丸碗。16は出土した中で最大の広東碗。口径13.5cm、器高7.75cmを測る。17は口縁部が外反する平碗。見込みに蛇の目釉剥ぎが施され、コンニャク印判で五弁花を押す。18は草文の丸碗。口縁がやや外反し、腰が張った形状を呈する。内外面に貫入が見られる。19～24はいずれも広東形の碗。19は松文、20は菊唐草文、21は竹文、22は山水文、23は草花文を描く。24は11と同一の意匠と規格をもつ製品。25は青磁の平碗で見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。26は笹文の小碗。27は菊唐草文の段重。

28～34は口径13～14cmの染付皿。28は見込みにコンニャク印判の五弁花、周囲に草花文を配す。高台内には「福」字くずし銘がある。29は見込みに草花文を巡らす、欠落部が大きく詳細は不明。30～32・34は同一の意匠と規格をもつ。見込みに山水文が描かれ、周囲に亀甲文と草花文を配す。蛇の目凹型高台で、肥前窯の18世紀後半以降の製品。32・34は焼成不良で透明釉が白濁している。33は輪花口縁のなます皿。見込みにコンニャク印判で五弁花を押す。高台内に銘があるが、判読は難しい。35～37は口径8～9cmの小皿。35は見込みにコンニャク印判の五弁花、周囲に四方襷文を巡らす、焼成不良で呉須の発色が悪い。36・37は白磁で、同一の意匠と規格をもつ。型打ち成形で輪花口縁。紅皿として使用されたものか。38は染付の瓶。竹文が描かれた胴部の最大径は16cmを測る。39は青磁瓶の底部。40は染付の小瓶。梅花文と竹文が描かれる。41は仏飯器。42は白磁のミニチュア皿で、紅

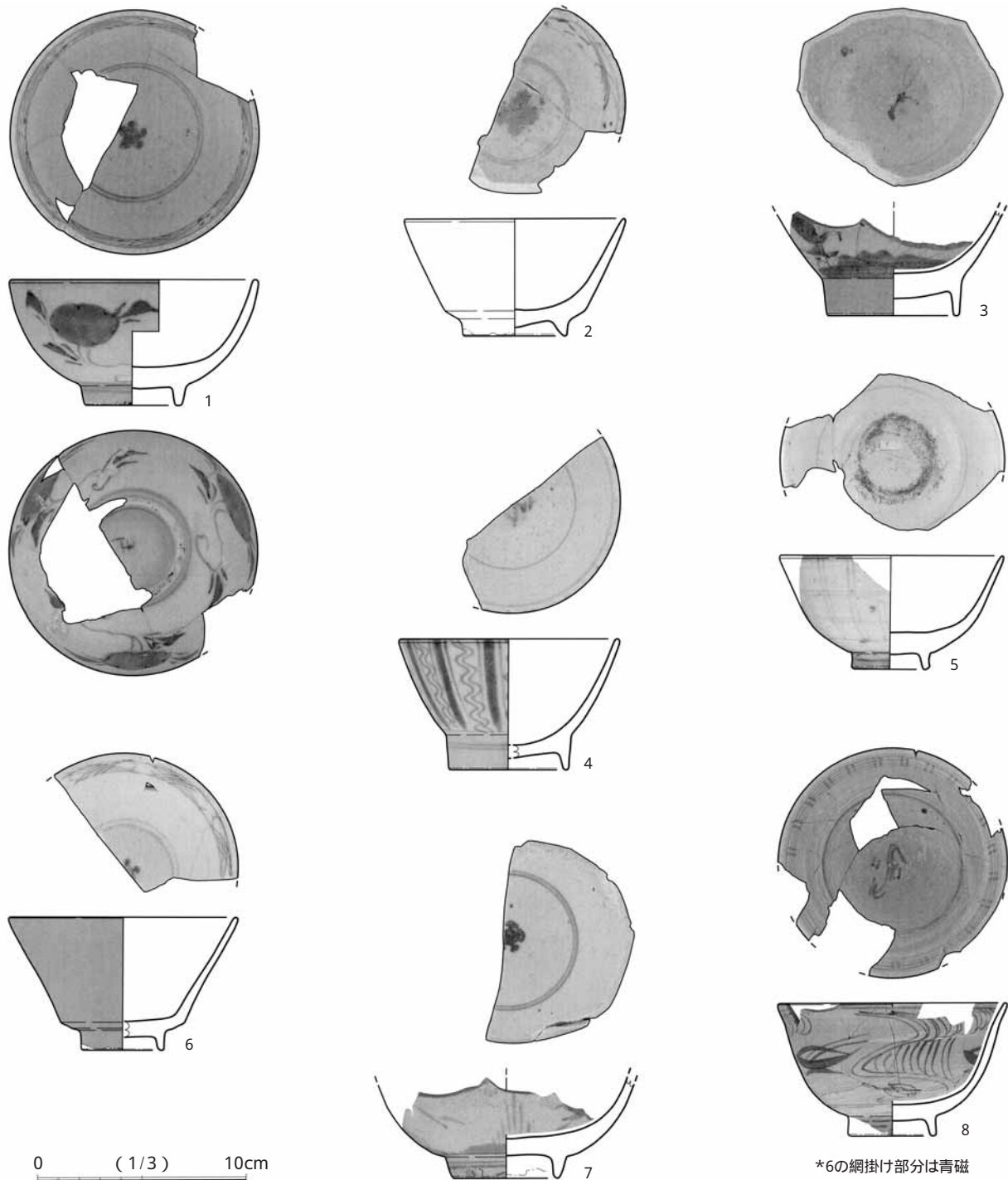


図7 陶磁器実測図①

皿か玩具として使用されたもの。

43～51は深川窯で焼かれた萩焼碗。深川窯は1653年に萩松本の御用窯から分窯し、18世紀初頭から生活雑器を中心とした民窯的側面をみせる。43・44は内外面とも藁灰釉を施す。44は見込みに三足ハマの熔着痕が残る。45～47は外面に粘性の強い二色の釉でピラ掛けを施す。内面は藁灰釉。48は内外面とも藁灰釉。45～48の高台は渦巻き状に削り込まれている。49・50は内外面に藁灰釉を施し、見込みには足付きハマの熔着痕が残る。51は内外面に藁灰釉を施し、胴部に鉄絵が描かれる。43～50の碗と比較して高台が小さい。43～51の高台はいずれも無釉で、削り出しが鋭い。19世紀前葉から幕末期

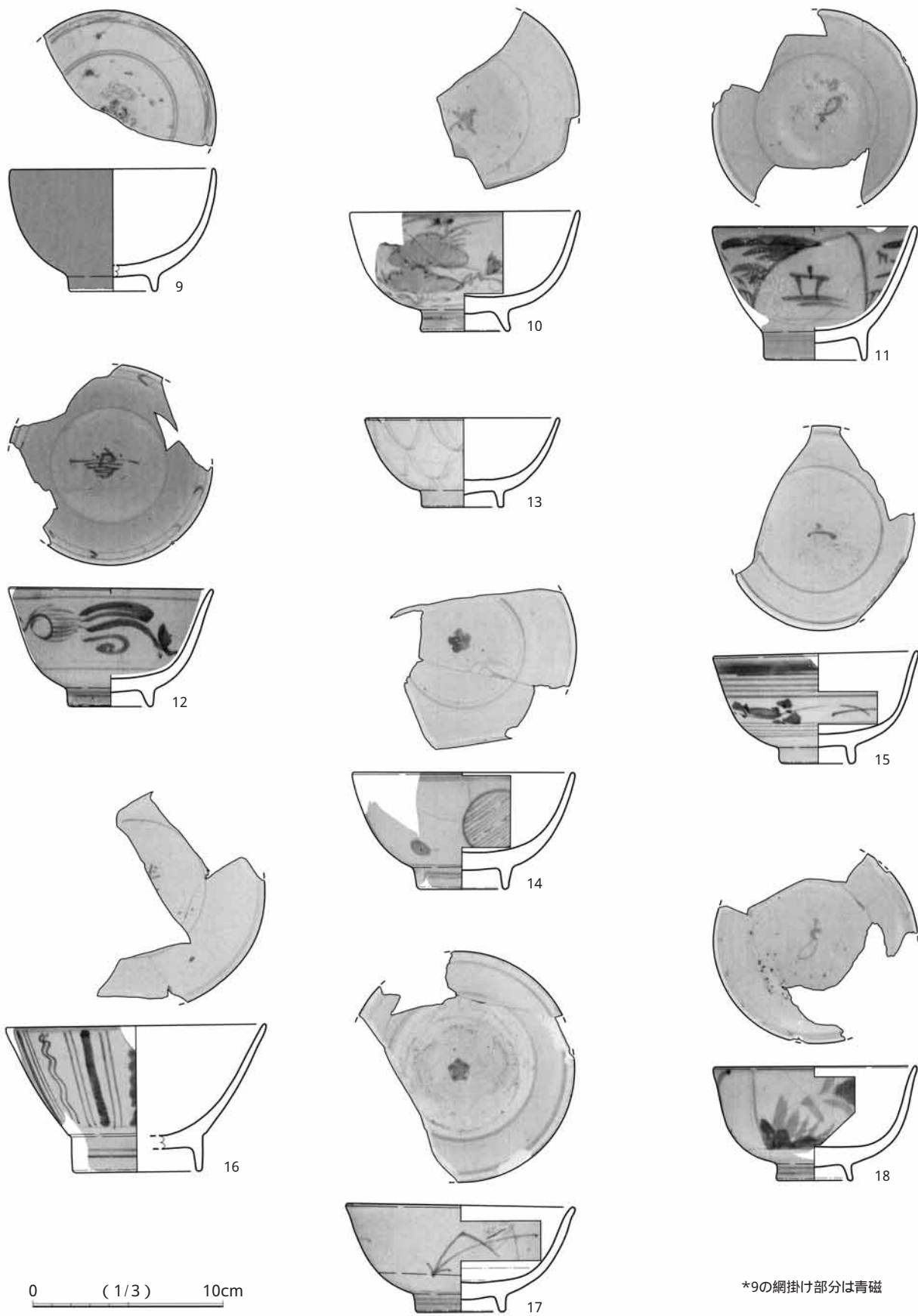


図8 陶磁器実測図②

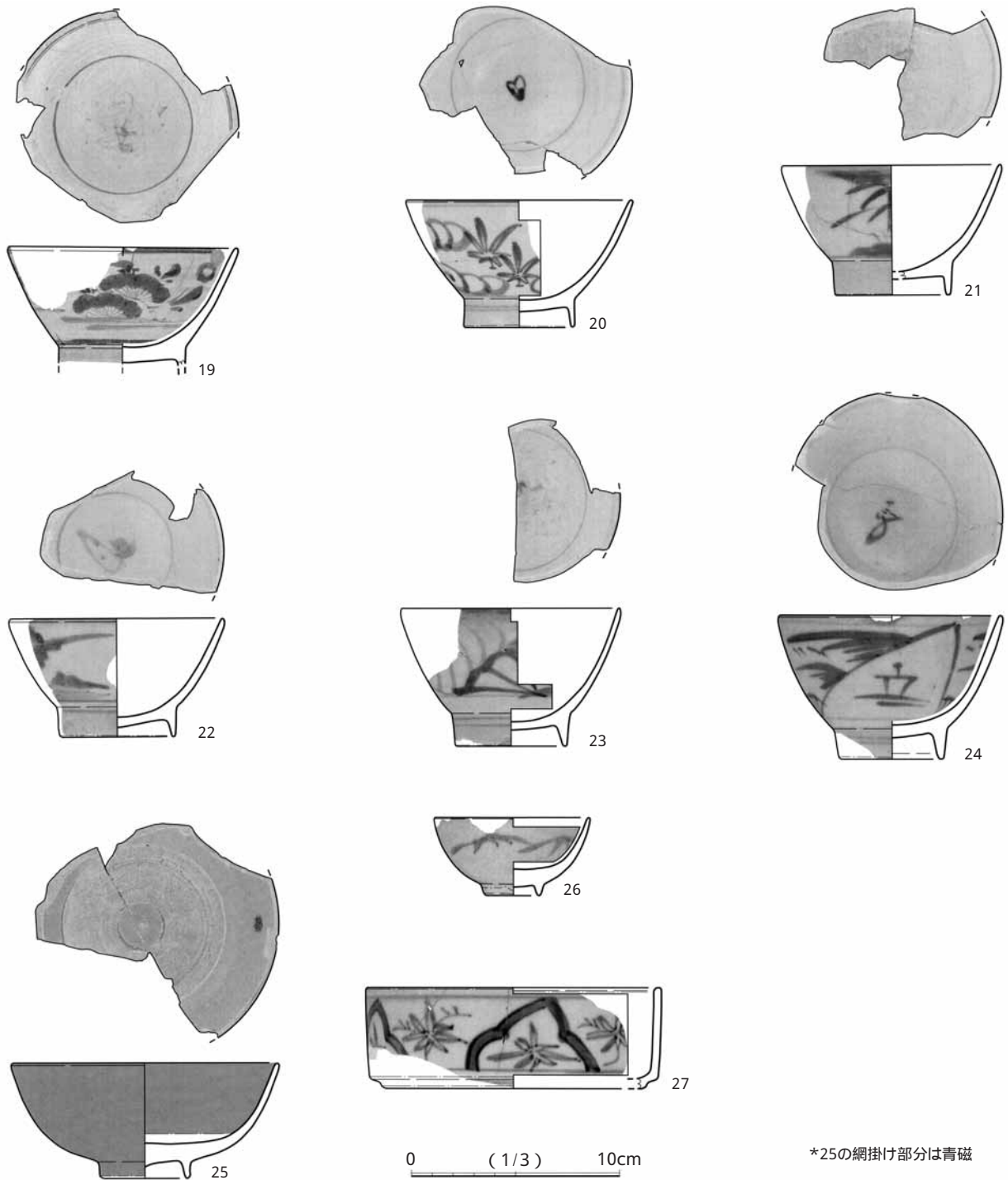


図9 陶磁器実測図③

の製品とみられる。

52は窯詰めに用いた匣鉢。「井」の刻印があり、口縁部と底部に重ね積みの痕跡が残る。よく焼き締まり、自然釉がかかる。53は土灰釉の片口。高台内は無釉。見込みに6箇所目痕が残る。注口は欠落している。54は陶胎染付の深皿。草花文を施す。焼成が甘く、呉須の発色は良くない。内外面に貫入がみられる。胎土はにぶい橙色（7.5YR 7/4）で精良。55は黒釉の皿。見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。焼成は良好。胎土は橙色（7.5YR 7/6）で微細な白色粒・黒色粒と雲母を含む。

56～58は擂鉢。56は鉄化粧が施され、注口が付く。器壁は薄い。口縁を外側に折り返し、肥厚させ

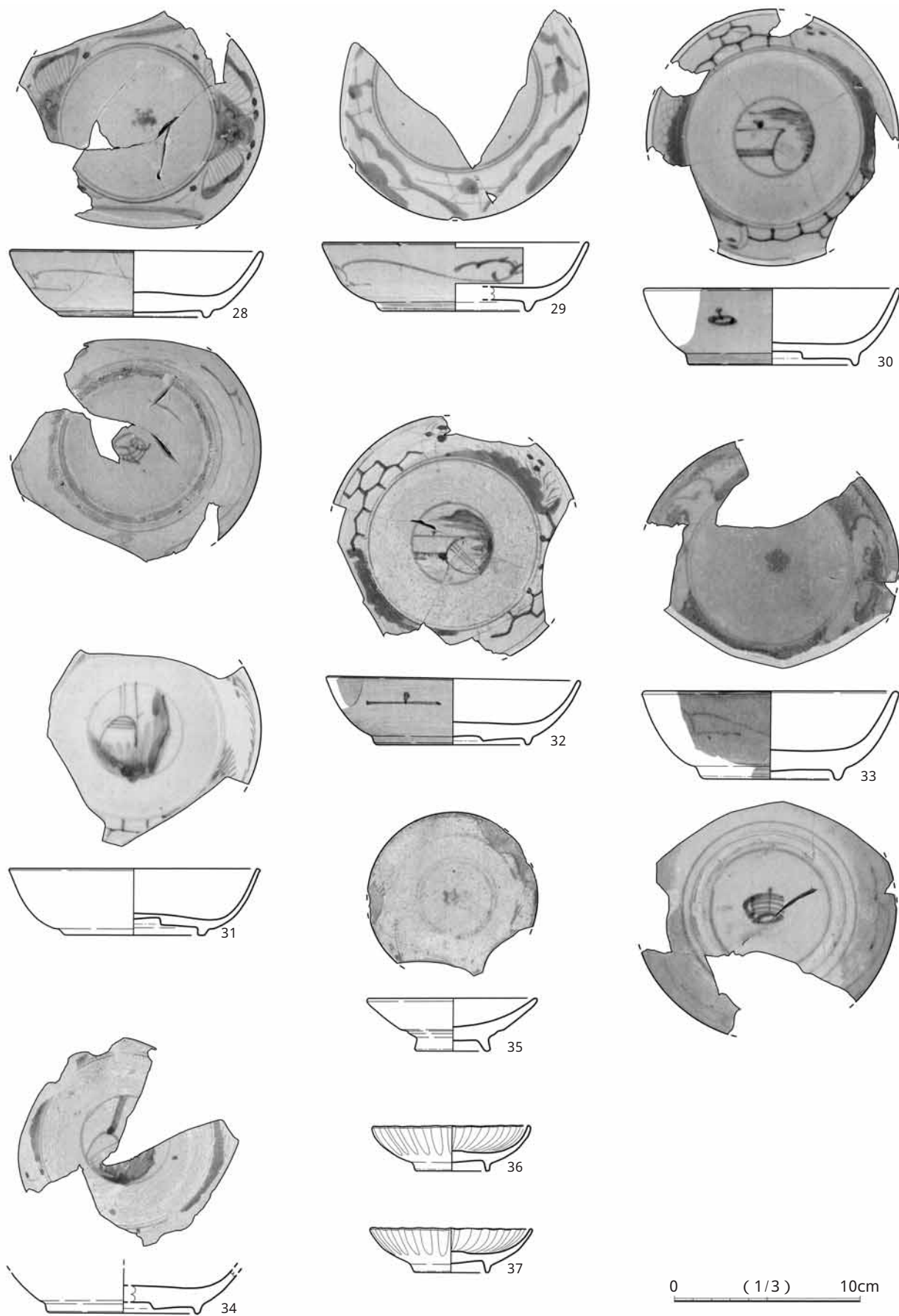


图10 陶磁器实测图④

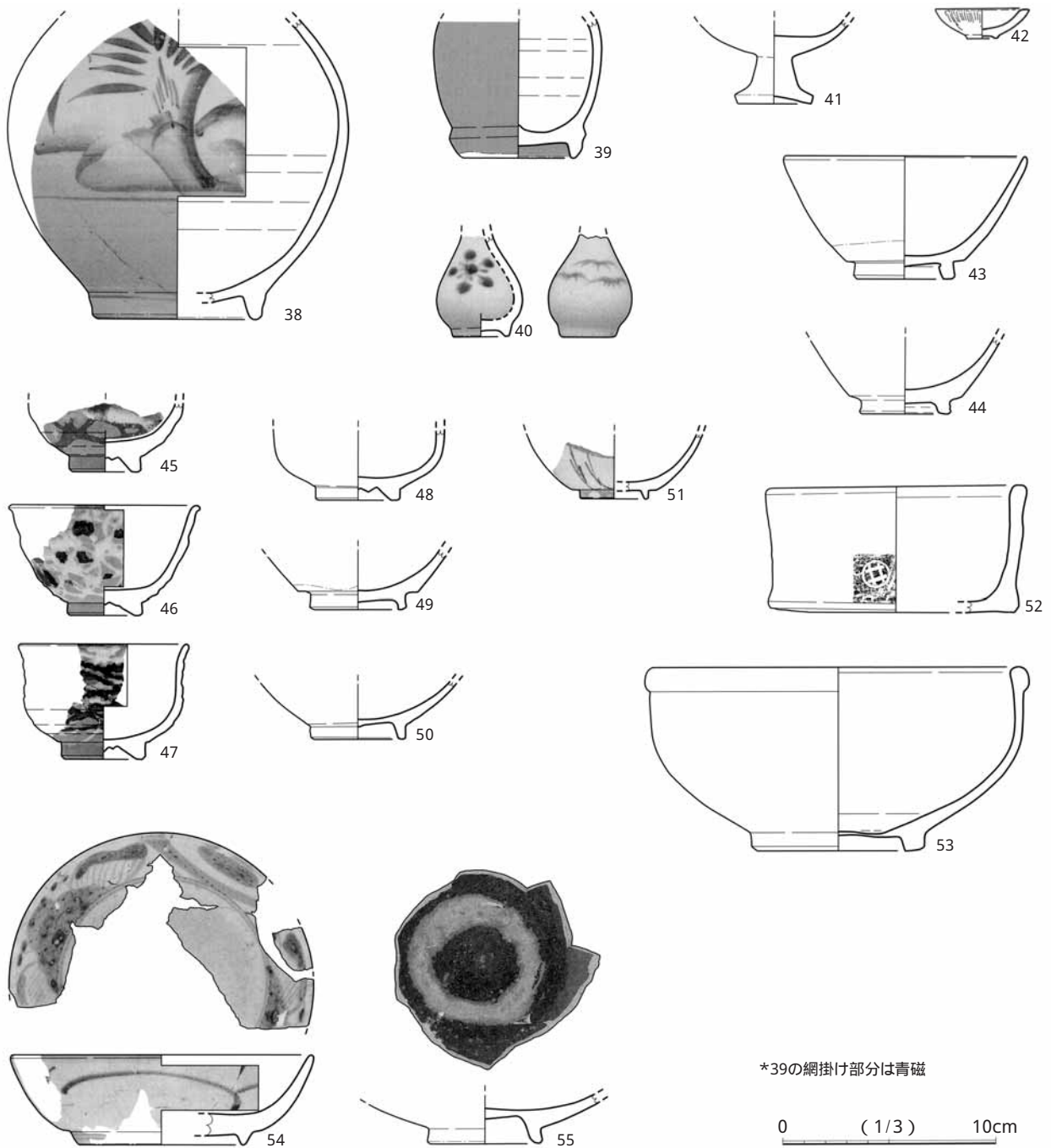


図11 陶磁器実測図⑤

ている。貼付高台で、高台脇に指による押圧痕、高台内に糸切り痕が残る。播目は微細。57は口縁片。復元口径は32cmを超え、器壁も厚い。口縁を外側に折り返し、肥厚させている。播目は粗い。58は小型製品の胴から底部。高台は付かない。見込みに目痕が残る。播目は細かい。

59・60は甕の底部。59の内面には横方向のハケとナデが確認できる。外面は摩滅のため調整不明。底部を貼り付けた押圧痕が内外面に残る。60は表面の剝離が激しく、内外面とも調整は不明。

61は火鉢。外面はアラレ文が彫られ、内面は楯状工具で強く横ナデしている。口縁近くに獅子頭を象る。62は鏝の付いた釜。内面には横方向にハケメが残る。器壁が薄く、近世の製品とみられる。63は軒平瓦の瓦当で唐草文を施す。

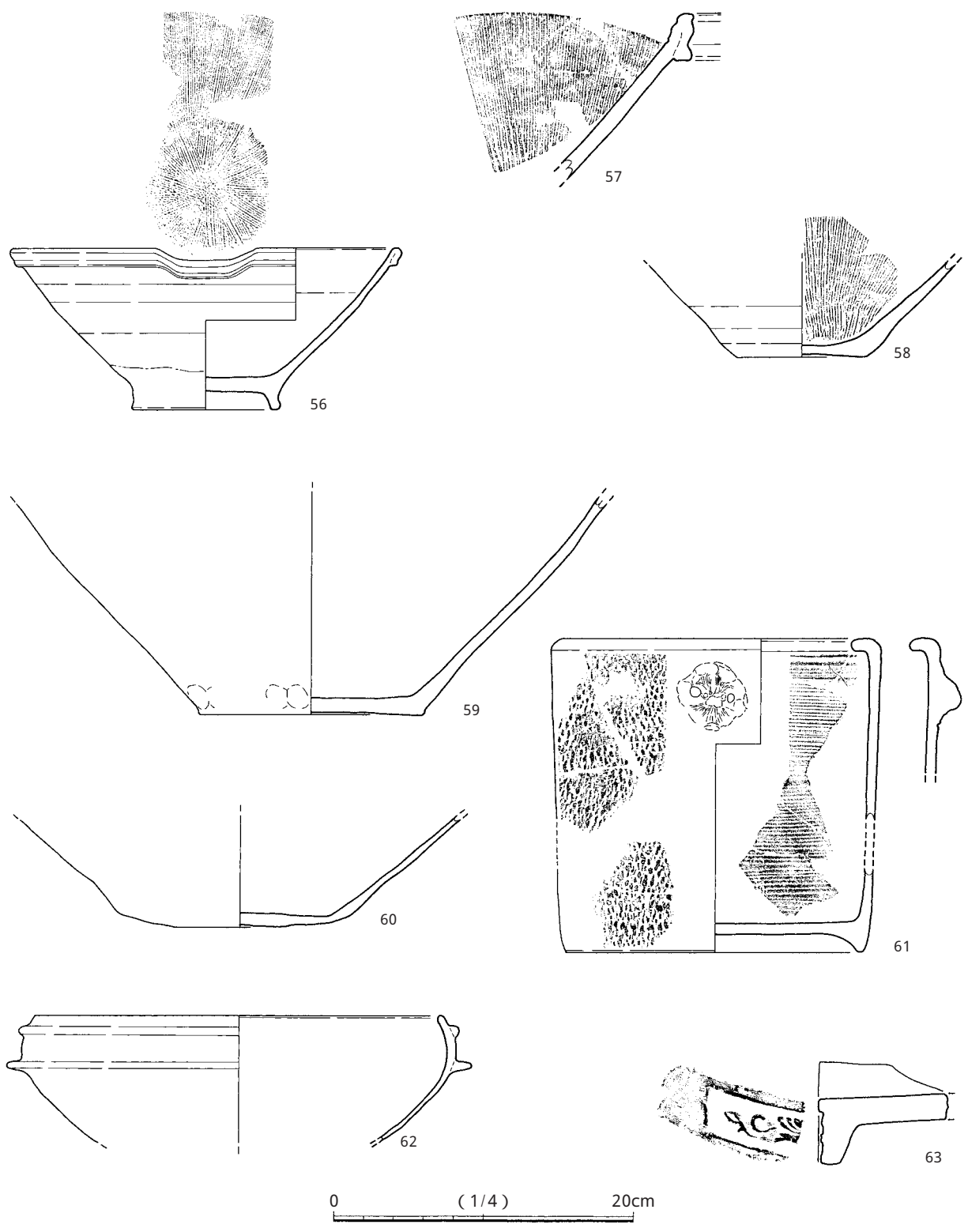


図12 陶磁器・土器・土製品実測図

64～70は素焼きの管状土錘。このタイプは弥生時代から最近までほぼ同じ形態をした手作りの製品が用いられているため、時期は特定できない。

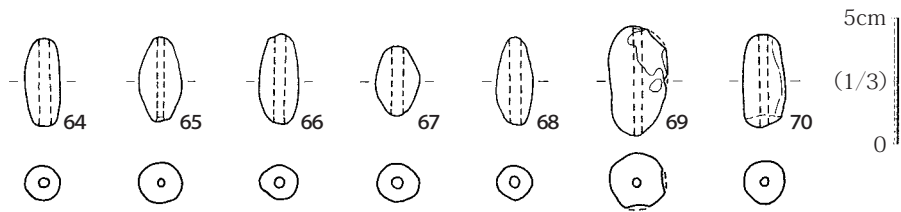


図13 土製品実測図

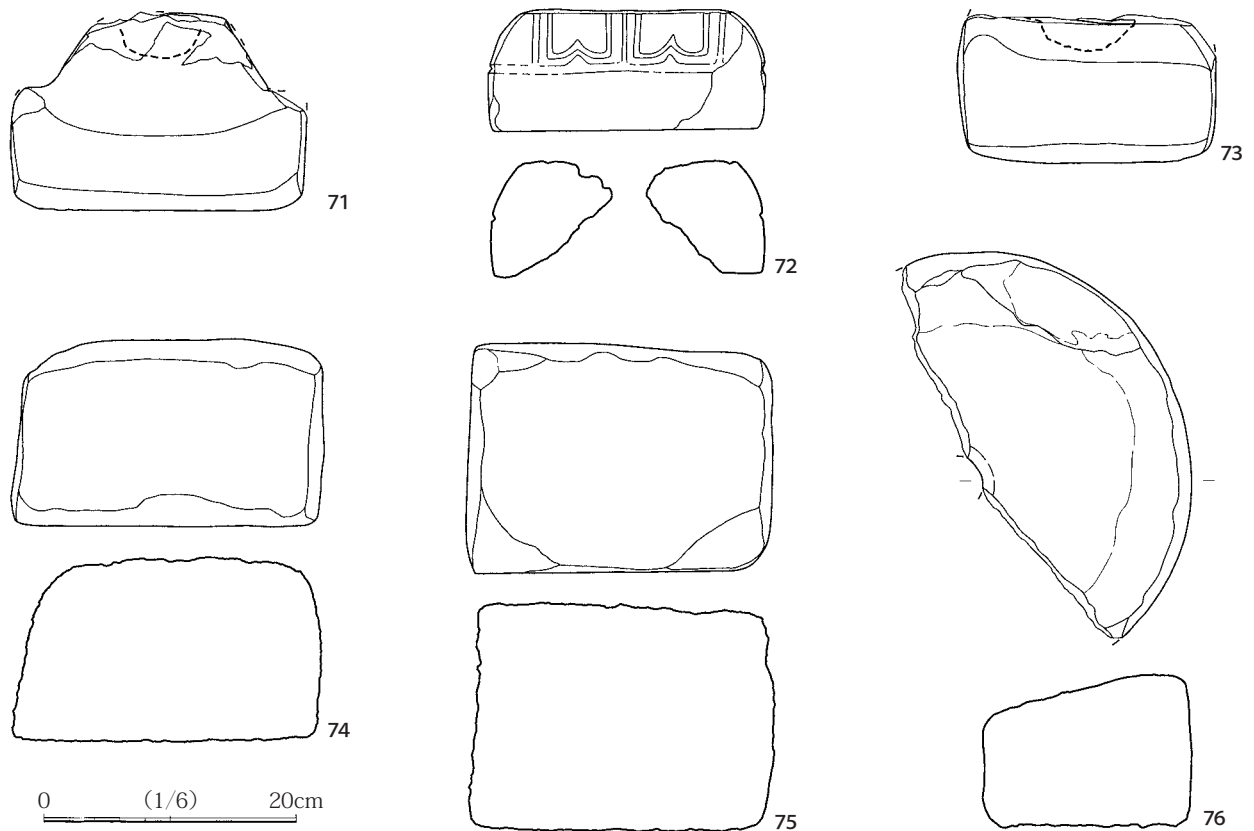


図14 石製品実測図①

② 石製品 (図14・16、図版12)

71～75は五輪塔の各部分である。五輪塔は日本独自のもので、12世紀末に出現する。地輪・水輪・火輪の三つの石の上に、風輪・空輪を一石で造ったものを重ねるのが一般的である。基壇が付くものもある (図15)。71は火輪。軒の形状が室町時代後期の特徴を示す。72～75は地輪。古いものは低平で、時代が下ると背が高くなるとされるが、時期は特定しにくい。74・75は基壇の可能性もある。石材は72が角閃石安山岩、他は花崗岩。いずれも表土除去時に出土したものであるが、石垣に転用されていた。調査区の南方に隣接する地区に五輪塔が散在すること

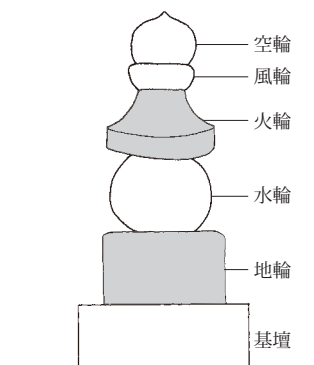


図15 五輪塔

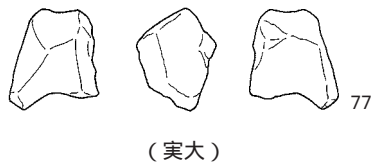


図16 石製品実測図②

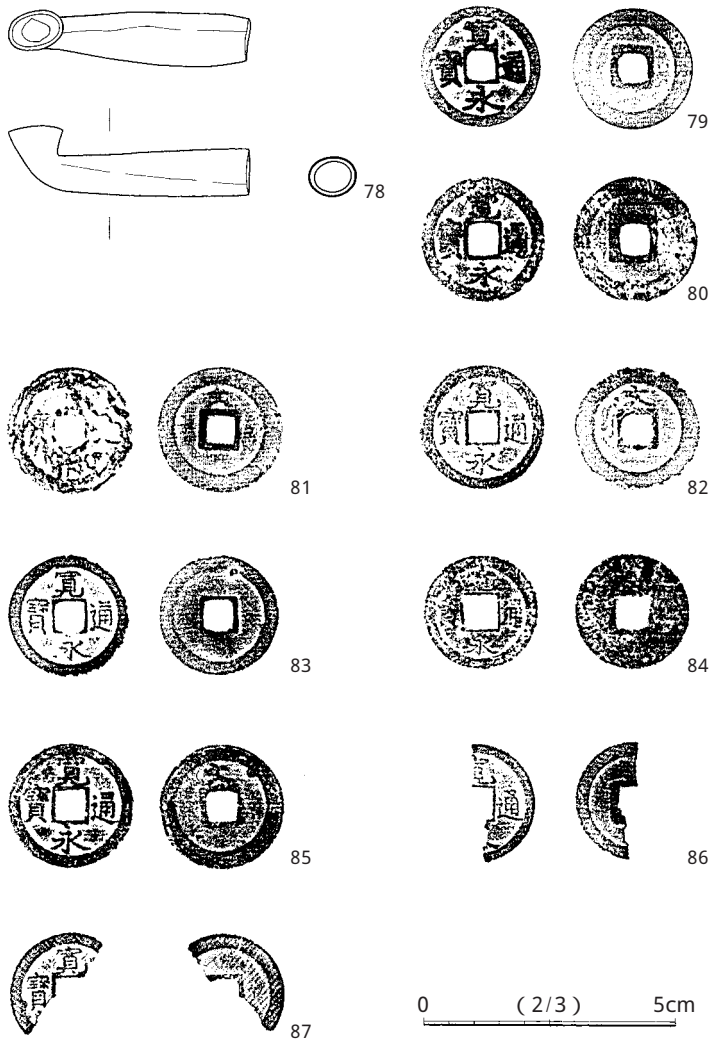


図17 金属製品・銭貨実測図

から、ここから持ち込まれたものとみられる。

76は石臼の下臼で、復元径は36.2cm。摩滅により白目は確認できない。花崗岩製。77は緑色チャート製の火打石。

③ 金属製品・銭貨 (図17、図版10・11)

78は銅製の煙管。火皿がある雁首で、長さは4.8cm。肩部や補強帯はなく、比較的新しいタイプである。

79～87は寛永通宝の銅銭（一文銭）。79・80は古寛永で、1636～1659年に鑄造されたもの。81～87は新寛永。81・82・85は背面に「文」の字があり、1668～1683年に鑄造されたもの。他は1697～1747年及び1767～1781年に鑄造されたもの。当時は墓に六道銭を副葬する風習もあったが、いずれも単独で出土しており、墓の存在を示唆するものではない。

引用・参考文献

山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター『竜王南遺跡』 2002
 山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター『萩城跡（外堀地区）Ⅱ』 2004
 山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センター『萩城跡（外堀地区）Ⅲ』 2006
 山口県教育委員会『萩焼長門深川古窯（本窯発掘調査報告）』 1987
 山口県教育委員会『萩焼長門深川古窯（西ノ窯発掘調査報告）』 1988
 兵庫埋蔵銭調査会『日本出土銭総覧』 1996
 九州近世陶磁学会『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（中国・四国・関西編）』 2007
 江戸遺跡研究会『江戸考古学研究事典』 2001

表1 出土遺物一覧①

遺物 番号	器種 (種類)	器形 (形状)	法量(cm)			出土場所	備 考	挿図 番号	図版 番号
			口径	底径 (高台径)	器高				
1	磁器	碗	(11.7)	(4.5)	6.05	1 地区	染付 コンニャク印判	7	6
2	磁器	碗	(10.4)	(4.8)	5.6	1 地区	染付 コンニャク印判	7	6
3	磁器	碗		6.1	(5.0)	1 地区	染付 広東碗	7	6
4	磁器	碗	(10.4)	(5.6)	6.3	1 地区	染付 広東碗	7	6
5	磁器	碗	10.7	3.5	5.45	1 地区 SK 1	染付 蛇の目釉剥ぎ	7	6
6	磁器	碗	(10.8)	(3.8)	6.4	2 地区	外面青磁 内面染付	7	6
7	磁器	碗		(5.0)	(4.9)	2 地区	染付 コンニャク印判	7	6
8	磁器	碗	10.8	(3.9)	6.35	4 地区	染付	7	6
9	磁器	碗	(10.6)	(4.5)	6.4	4 地区	外面青磁 内面染付	8	7
10	磁器	碗	(12.0)	(4.6)	6.3	4 地区	染付	8	6
11	磁器	碗	10.5	5.15	7.1	4 地区	染付 広東碗	8	7
12	磁器	碗	10.55	4.15	6.25	4 地区	染付	8	7
13	磁器	碗	10.1	2.05	4.7	4 地区	染付 蛇の目釉剥ぎ	8	7
14	磁器	碗	(11.5)	4.35	6.15	4 地区	染付 コンニャク印判	8	7
15	磁器	碗	10.65	3.6	5.9	4 地区	染付	8	7
16	磁器	碗	(13.5)	(6.4)	7.75	4 地区	染付 広東碗	8	7
17	磁器	碗	11.85	4.45	5.75	4 地区	染付 蛇の目釉剥ぎ	8	8
18	磁器	碗	10.55	3.8	6.0	4 地区	染付	8	8
19	磁器	碗	(11.0)	(6.2)	(5.7)	4 地区	染付 広東碗	9	8
20	磁器	碗	(10.8)	5.15	6.1	4 地区	染付 広東碗	9	8
21	磁器	碗	(10.4)	(5.3)	6.3	4 地区	染付 広東碗	9	—
22	磁器	碗	(10.2)	5.35	5.7	4 地区	染付 広東碗	9	—
23	磁器	碗	(10.4)	(5.2)	6.65	4 地区	染付 広東碗	9	—
24	磁器	碗	(10.6)	4.8	6.95	4 地区	染付 広東碗	9	8
25	磁器	碗	(12.7)	(4.0)	5.55	4 地区	青磁 蛇の目釉剥ぎ	9	8
26	磁器	小碗	(7.4)	2.55	3.7	4 地区	染付	9	7
27	磁器	段重	(14.0)	(12.4)	4.8	4 地区	染付	9	7
28	磁器	皿	(13.4)	(7.8)	3.6	1 地区	染付 コンニャク印判	10	9
29	磁器	皿	(14.2)	7.8	3.7	1 地区	染付	10	9
30	磁器	皿	13.6	8.95	4.15	4 地区	染付 蛇の目凹型高台	10	9
31	磁器	皿	(13.35)	7.4	3.6	4 地区	染付 蛇の目凹型高台	10	9
32	磁器	皿	13.0	8.05	3.7	4 地区	染付 蛇の目凹型高台	10	9
33	磁器	皿	(13.5)	7.2	4.8	4 地区	染付 コンニャク印判	10	9
34	磁器	皿		8.0	(2.4)	4 地区	染付 蛇の目凹型高台	10	10
35	磁器	小皿	(9.0)	3.6	2.85	4 地区	染付	10	10
36	磁器	小皿	8.35	3.8	2.45	4 地区	白磁 輪花	10	8
37	磁器	小皿	8.6	3.8	2.4	4 地区	白磁 輪花	10	8
38	磁器	瓶		(7.6)	(14.1)	4 地区	染付	11	9
39	磁器	瓶		5.1	(6.5)	4 地区	青磁	11	10
40	磁器	小瓶		2.65	(4.8)	1 地区	染付	11	10
41	磁器	仏飯器		3.45	(3.9)	2 地区		11	—
42	磁器	ミニチュア皿	(4.4)	(1.4)	1.4	1 地区 SK25	白磁	11	8
43	陶器	碗	(11.25)	4.45	5.75	1 地区	萩焼(深川窯)	11	10
44	陶器	碗		4.0	(3.6)	1 地区	萩焼(深川窯)	11	—
45	陶器	碗		3.05	(3.25)	1 地区	萩焼(深川窯)	11	—

※法量の()の数字は復元径・残存高を示す。

表2 出土遺物一覧②

遺物 番号	器種 (種類)	器形 (形状)	法量(cm)			出土場所	備 考	挿図 番号	図版 番号
			口径	底径 (高台径)	器高				
46	陶器	碗	(8.7)	2.3	5.15	4地区	萩焼(深川窯)	11	10
47	陶器	碗	(7.8)	3.75	5.4	4地区	萩焼(深川窯)	11	10
48	陶器	碗		3.8	(3.35)	4地区	萩焼(深川窯)	11	—
49	陶器	碗		4.05	(2.8)	4地区	萩焼(深川窯)	11	—
50	陶器	碗		4.1	(2.7)	4地区	萩焼(深川窯)	11	—
51	陶器	碗		(3.0)	(3.1)	4地区	萩焼(深川窯)	11	—
52	窯道具	匣鉢	11.9	11.5	6.0	1地区	刻印「井」	11	10
53	陶器	鉢	17.1	7.6	8.7	4地区	土灰釉	11	11
54	陶器	皿	14.1	(7.7)	4.15	1地区	陶胎染付	11	10
55	陶器	皿		5.1	(2.3)	4地区	黒釉 蛇の目釉剥ぎ	11	10
56	陶器	播鉢	(26.2)	9.9	10.8	4地区	鉄化粧	12	11
57	陶器	播鉢	(32.6)		(11.1)	4地区		12	—
58	陶器	播鉢		(8.6)	(6.4)	4地区		12	—
59	土師器	甕		15.1	(14.7)	1地区埋甕14	底部のみ	12	11
60	土師器	甕		15.5	(7.5)	1地区埋甕35	底部のみ	12	11
61	瓦質土器	火鉢	(22.0)	(19.8)	(21.1)	4地区		12	11
62	瓦質土器	釜	(27.2)		(8.5)	4地区		12	11
63	瓦	軒平瓦				4地区	瓦当 唐草文	12	—
64	土製品	土錘	1.35	0.45	3.45	1地区SK 9		13	11
65	土製品	土錘	1.7	0.3	3.3	1地区SK20		13	11
66	土製品	土錘	1.5	0.4	3.55	1地区SK25		13	11
67	土製品	土錘	1.7	0.45	2.25	1地区SK25		13	11
68	土製品	土錘	1.45	0.45	3.45	1地区SK30		13	11
69	土製品	土錘	(2.2)	0.35	4.3	1地区		13	11
70	土製品	土錘	1.7	0.35	3.65	1地区		13	11
71	石製品	石塔	23.5		15.6	1地区	火輪 花崗岩	14	12
72	石製品	石塔	22.0		9.6	1地区	地輪 角閃石安山岩	14	12
73	石製品	石塔	20.5		11.8	1地区	地輪 花崗岩	14	12
74	石製品	石塔	24.8		14.9	2地区	地輪 花崗岩	14	12
75	石製品	石塔	24.4		18.2	2地区	地輪 花崗岩	14	12
76	石製品	石臼	(36.2)		12.1	2地区	花崗岩	14	12
77	石製品	火打石				1地区	緑色チャート	16	12
78	金属製品	煙管			1.4	1地区SK24	雁首	17	10
79	銭貨	寛永通宝				2地区	古寛永	17	11
80	銭貨	寛永通宝				2地区	古寛永	17	11
81	銭貨	寛永通宝				2地区	新寛永 背文	17	11
82	銭貨	寛永通宝				1地区	新寛永 背文	17	11
83	銭貨	寛永通宝				4地区	新寛永	17	11
84	銭貨	寛永通宝				1地区SK45	新寛永	17	11
85	銭貨	寛永通宝				1地区	新寛永 背文	17	11
86	銭貨	寛永通宝				2地区	新寛永	17	11
87	銭貨	寛永通宝				2地区	新寛永	17	11
88	土師器	不明				1地区	古代	—	12
89	瓦質土器	足鍋				2地区	中世 脚部のみ	18	12

※法量の()の数字は復元径・残存高を示す。

※土錘は最大径を口径欄、孔径を底径欄、長さを器高欄に記載。石塔は幅を口径欄に記載。

4 まとめ

今回の調査区からは遺跡の性格を特定する明確な遺構は検出されなかったが、南に隣接する地区には中世以降の五輪塔が散在し、古い墓石等も存在する。このことから、道祖ノ本遺跡は中・近世の埋葬跡で、今回の調査区はその延長部分と位置づけるのが妥当であろう。

海を挟んだ熊毛半島東岸には向田遺跡・吉毛遺跡があり、多くの中・近世墓が確認されている。両遺跡の調査資料から判断すると、本調査で検出された数基の土坑が墓であるなら、本来の遺構面から50～100cm削平されていることになる。また、1地区南端部で堆積土の状況を確認すると、大量の土砂で短期間に埋められていることが判明した(トレンチ11・12)。さらに、2地区道路側でも石垣を築いて、最大で約90cm嵩上げをしている。この石垣に五輪塔の一部が転用されていた。これらの状況から、平地の少ない柳井地域では、海岸部の干拓だけでなく山麓の埋葬地までも階段状に耕地化することで農業生産を拡大してきたことが推測される。この農業開発により調査区内の遺構の多くは消失したとみられるが、遺跡の中核部は現在も墓地として利用されている丘陵の南斜面に埋存している可能性が高い。

出土遺物は近世陶磁器が大半を占める。これらは4地区の道路部分の遺構検出時に、傾斜の急な部分から集中して出土した。単なる廃棄ではなく、地固め等の目的で利用したものと考えられる。陶磁器は一定の伝世期間も考慮する必要があるため、明確な時期は決めるにいが、19世紀後半に道路が造られ、本格的な農業開発が行われたものと推定される。

近世陶磁器の中に肥前系磁器や萩焼が含まれていた。柳井津が流通の拠点として発展した藩政時代の遺物である。山口県内の近世遺物資料から、当地に肥前系磁器が大量に流通するのは18世紀中葉から幕末期と推測される。また、出土した萩焼は19世紀前葉から幕末期に生産された深川窯の製品とみられる。深川窯は岩国吉川家とつながりが深く、岩国藩窯多田焼の開窯にも関わっている。深川窯のピラ掛け製品は移出主体であったことも確認されている。これらは江戸後期の陶磁器流通を考察するうえで興味深い資料といえよう。

最後に、中世以前の遺物について付け加えておく。1地区の遺構検出時に古代の所産とみられる土師器が出土している。細片のため詳細は不明であるが、甕の胴部と推定される(図版12)。また、2地区では中世の足鍋の脚部が出土した。成形時の指頭痕が確認できる(図18、図版12)。いずれも単独で出土しており、近隣から運び込まれた土砂に含まれていた可能性も否めない。周辺の発掘調査によって新たな資料が追加され、中世以前の当地の歴史が解明されることを期待したい。

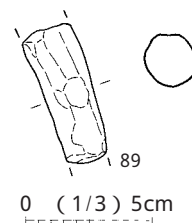


図18 土器実測図

付編 道祖ノ本遺跡の土壌分析

応用地質株式会社

(1) 道祖ノ本遺跡における花粉・寄生虫卵分析

1) 分析目的

道祖ノ本遺跡において検出された埋甕及び土坑内の埋土について、花粉分析・寄生虫卵分析を実施することにより、遺跡周辺の植生環境及び人糞施肥の有無やトイレ遺構の可能性を検討する。

2) 分析試料

分析試料は道祖ノ本遺跡の埋甕及び土坑の内部から採取した土壌、3試料である。試料の採取は、山口県埋蔵文化財センターが行った。表1-1に分析試料一覧表を示す。

表1-1 花粉・寄生虫卵分析 分析試料一覧

遺構名	採取場所	採取年月日
SK 9	埋土	2007/7/26
埋甕14	埋土	2007/7/19
埋甕35	埋土	2007/7/23

3) 分析方法

花粉・寄生虫卵の分離抽出は、中村（1973）の方法に基づいて以下の手順で行った。

- ①サンプルを採量する。
- ②0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎する。
- ③篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- ④25%フッ化水素酸を加え30分静置する（2～3回混和する）。
- ⑤水洗後サンプルを各分析用に2つに分ける。
- ⑥分けたサンプルの一方にアセトリシス処理を施す。
- ⑦両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入し、それぞれ標本（プレパラート）を作製する。
- ⑧検鏡は、生物顕微鏡で300～1000倍でプレパラート全面を操作し、その種類を同定・計数する。
- ⑨検出された種類とその個数の一覧表にまとめる。

花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラス（指標）として、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

なお、花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

4) 分析結果

4)－1 花粉分析

・分類群

出現した分類群は、樹木花粉5、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉10、シダ植物孢子2形態の計19であった。これらの学名と和名および粒数を表1－2に示し、花粉数が100個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1－1に示す。主要な分類群について、顕微鏡写真を写真1－1に示す。

以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

マツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、クリ、コナラ属コナラ亜属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科－イラクサ科、ウコギ科

[草本花粉]

イネ科、カヤツリグサ科、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物孢子]

単条溝孢子、三条溝孢子

・花粉群集の特徴

① SK 9

花粉が検出されない。

② 埋甕14

花粉密度が極めて低く、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科がわずかに検出される。

③ 埋甕35

花粉密度は低く、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科が高率に出現し、ソバ属、キク亜科、ヨモギ属などが出現する。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属を主に、スギ、コナラ属コナラ亜属が出現する。樹木・草本花粉のウコギ科が出現する。

4)－2 寄生虫卵分析

① SK 9

寄生虫卵および明らかな消化残査は検出されない。

② 埋甕14

寄生虫卵および明らかな消化残査は検出されない。

③ 埋甕35

寄生虫卵および明らかな消化残査は検出されない。

表1-2 道祖ノ本遺跡における花粉・寄生虫卵分析結果

分類群				
学名	和名	SK 9	埋甕14	埋甕35
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉			
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属			21
Cryptomeria japonica	スギ			11
Alnus	ハンノキ属			1
Castanea crenata	クリ			3
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属			4
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科 - イラクサ科			3
Araliaceae	ウコギ科			7
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科		3	61
Cyperaceae	カヤツリグサ科		1	
Fagopyrum	ソバ属			7
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科 - ヒユ科			2
Caryophyllaceae	ナデシコ科			2
Cruciferae	アブラナ科			2
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科			1
Lactucoideae	タンポポ亜科			1
Asteroideae	キク亜科			6
Artemisia	ヨモギ属			6
Fern spore	シダ植物孢子			
Monolate type spore	単条溝孢子	5	1	3
Trilate type spore	三条溝孢子	3	1	10
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	40
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	10
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	4	88
Total pollen	花粉総数	0	4	138
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の花粉密度	0.0	0.7	1.7
			× 10	× 10 ²
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	8
Fern spore	シダ植物孢子	8	2	13
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)	(-)	(-)

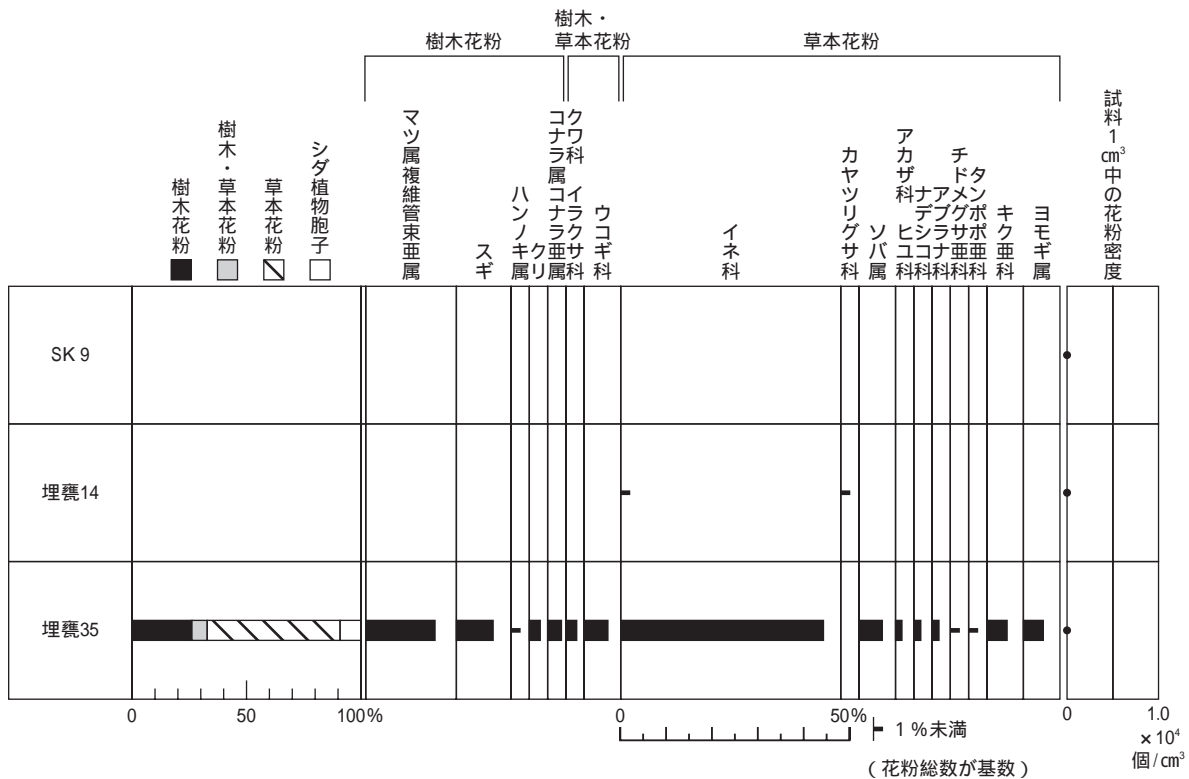


図1-1 道祖ノ本遺跡における花粉ダイアグラム

5) 考察

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。同時に寄生虫卵分析を行うことにより、生活域の確認や人糞施肥の有無、あるいはトイレ遺構を確認することも可能である。

5)-1 遺跡周辺の植生

埋壺14及び埋壺35の花粉分析結果より、イネ科を主にソバ属、キク亜科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などの草本花粉、マツ属複維管束亜属を主に、スギ、コナラ属コナラ亜属などの樹木花粉が検出されている。ソバ属以外は、いずれも花粉生産量が多く、広域に散布される風媒花植物であり、周辺に生育する植物からもたらされたものとみなされる。一方、ソバ属は虫媒花植物であり、前出の草本類ほど花粉が広域に散布しないことから、ソバ属の花粉が数%の割合で出現するという事は、周囲でのソバの集約的な栽培を示唆している。

したがって、遺構の周辺ではソバの栽培が行われ、その周辺にはイネ科を主とする草本類が多く生育する人為的な開地が分布していたと推定される。さらに周辺地域には、マツ属複維管束亜属（アカマツ）の二次林あるいは里山としての造林と、スギの造林が分布していたと推定される。

5)-2 遺構の用途

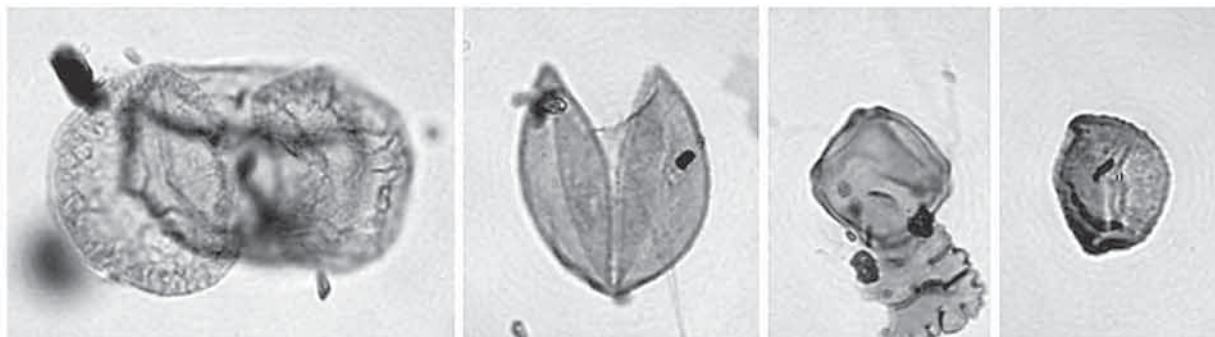
3 試料とも寄生虫卵は検出されておらず、トイレ遺構の可能性を指摘することはできなかった。遺

構内の堆積環境を推定すると、SK 9 及び埋甕14は、花粉が検出されないか極めて低密度であり、かつ寄生虫卵も検出されないことから、堆積速度が速かったことが考えられ、その理由として放棄されたのち急速に埋められたことが想定される。したがって、試料となった堆積物は、遺構が使用されていた当時のものではない可能性が高く、直接的に遺構の性格を推定することはできない。

一方、埋甕35では、寄生虫卵は検出されなかったが、花粉群集から周囲でソバを主とする集約的な畑作が行われていた可能性が示唆されていることから、畑に伴う水溜であった可能性が示唆される。

参考文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村純（1973）花粉分析. 古今書院, p.82-110.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として. 第四紀研究, 13,p.187-193.
- 中村純（1977）稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.
- 中村純（1980）日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archacological Science*, 19, p.231-245.
- 金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p. 9 -55.
- 金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.
- 金原正明（1999）寄生虫. 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.

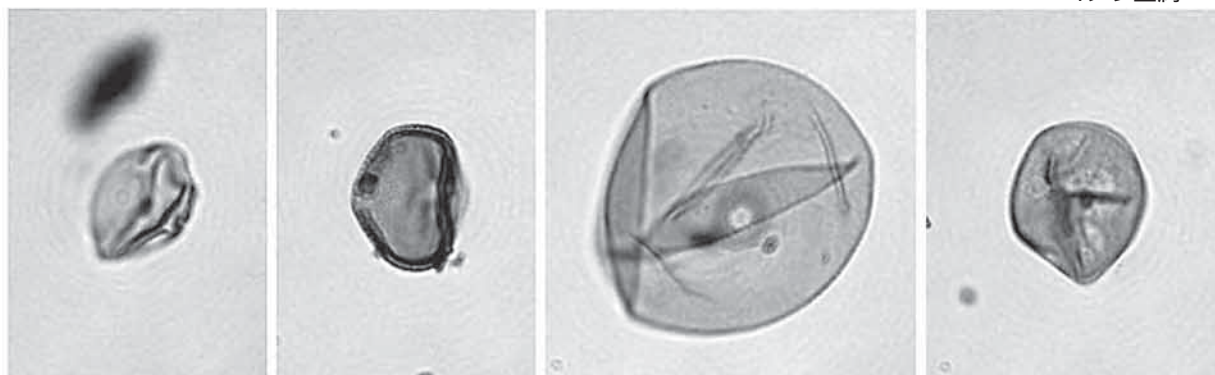


1 マツ属複維管束亜属

2 スギ

3 ハンノキ属

4 コナラ属
コナラ亜属

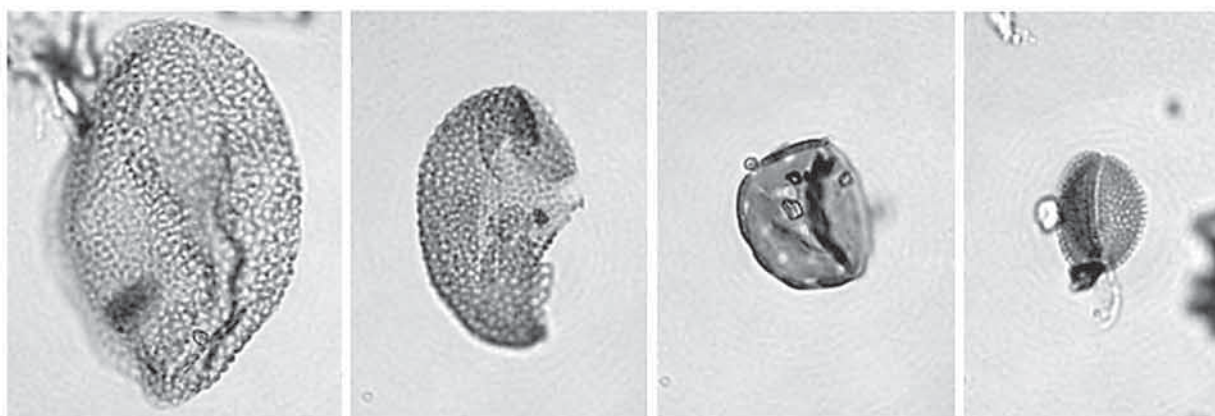


5 クワ科 - イラクサ科

6 ウコギ科

7 イネ科

8 カヤツリグサ科

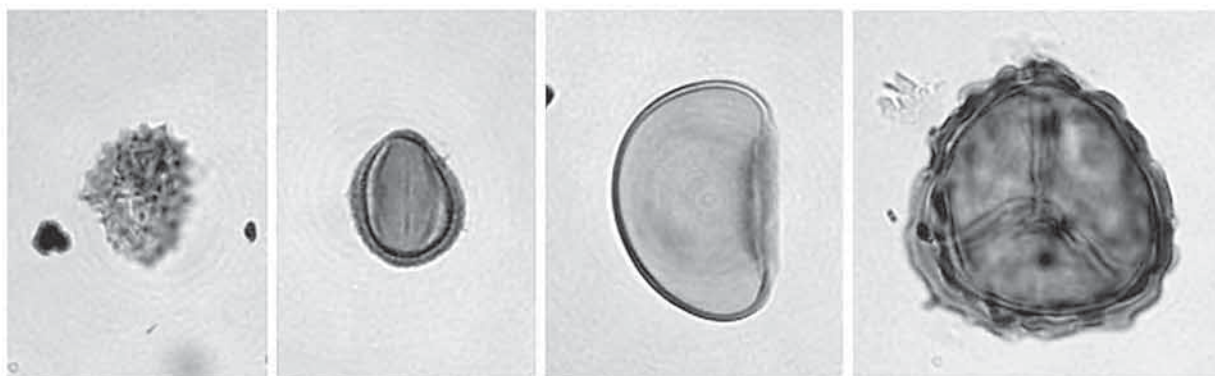


9 ソバ属

10 ソバ属

11 アカザ科 - ヒユ科

12 アブラナ科



13 キク亜科

14 ヨモギ属

15 シダ植物単条溝孢子

16 シダ植物三條溝孢子

— 10 μm

写真1-1 検出された花粉・胞子の顕微鏡写真

(2) 道祖ノ本遺跡におけるリン酸・カルシウム分析

1) 分析目的

道祖ノ本遺跡において検出された埋甕及び土坑内の埋土について、リン酸・カルシウム分析を実施することにより、遺体が埋納されていた可能性を検討する。

2) 分析試料

分析試料は道祖ノ本遺跡の埋甕及び土坑の内部から採取した土壌、3試料である。試料の採取は、山口県埋蔵文化財センターが行った。表2-1に分析試料一覧表を示す。

表2-1 リン酸・カルシウム分析 分析試料一覧

遺構名	採取場所	採取年月日
SK 9	埋土	2007/7/26
埋甕14	埋土	2007/7/19
埋甕35	埋土	2007/7/23

3) 分析方法

リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解-原子吸光度法、腐植はチューリン法で実施した(土壤養分測定法委員会, 1981; 土壤標準分析・測定法委員会, 1986)。以下に分析の処理工程を示す。

〈試料の調整〉

- ①試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。
- ②風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。
- ③風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5mmφのふるいを全通させる(微粉砕試料)。

〈リン酸・カルシウム分析〉

- ①風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。
- ②放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。
- ③分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。
- ④ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて吸光度計によりリン酸(P_2O_5)濃度を測定する。
- ⑤別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。
- ⑥これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P_2O_5 mg/g)とカルシウム含量(Ca mg/g)を求める。

4) 分析結果

リン酸・カルシウム分析の分析結果一覧を表2-2に示す。

表2-2 リン酸・カルシウム分析 分析結果

遺構名	採取場所	リン酸(mg/g)	カルシウム(mg/g)
SK 9	埋土	0.2	0.62
埋甕14	埋土	0.2	0.59
埋甕35	埋土	1.9	1.0
定量下限値		0.1	0.01

4)ー1 リン酸分析

骨にはリン酸が多く含まれている。リン酸は水にほとんど溶けないため、土中での移動が小さく、カルシウムに比べ溶脱、拡散による均質化が起こりにくい。土壌のリン酸分析は、これまで全国各地の遺跡で行われているが、自然状態でのリン酸含量に着目すると、沖積土で1 mg/g、火山灰性の土壌では3～4 mg/g程度を示す場合が多い。

以上を踏まえて、本遺跡におけるリン酸の分析値を見ていくと、SK 9及び埋甕14は、1 mg/g以下の値を示しており、これは自然状態の土壌の中でも低い値に相当する。これに対し、埋甕35のリン酸含量は1.9mg/gで自然状態よりもやや高い値を示しており、遺体が埋納されていた可能性が残る。

4)ー2 カルシウム分析

骨にはリン酸とともに、カルシウムも多く含まれている。ただし、カルシウムは水に溶けやすいため、土中で拡散しやすい。また、石灰岩が分布する地域では値が高くなるなど周辺地質の影響も受けやすい。そのため自然状態で含まれるカルシウムは、地域によってばらつきが大きい。

そこで、遺体が埋納されていた可能性を判断する場合には、各遺構におけるリン酸含量とカルシウム含量との相関性に着目する。

以上を踏まえて、本遺跡におけるカルシウム含量を見ていくと、3試料とも0.6～1.0mg/gの範囲内であり、これは自然状態の土壌の値を示している。ただし、3試料のうち、リン酸含量が最も高かった埋甕35は、カルシウム含量も高い値を示している。

5) 考察

遺体埋納の痕跡が認められる場合には、一般的に、遺構の周辺土壌に対して遺構内のみリン酸含量が高くなったり、遺構内の各分析値のばらつきが大きくなるなどの傾向がみられる。

今回の場合、各遺構内1点のみの分析であったため、これらの傾向を見ることはできない。しかしながら、分析値の傾向から以下のような可能性が指摘できる。

- ・埋甕35は、遺体を埋納した可能性が若干残る。
- ・SK 9及び埋甕14は、遺体を埋納した可能性は低い。

引用・参考文献

土壌養分測定法委員会編，1981，土壌養分分析法．養賢堂，440p．

土壌標準分析・測定法委員会編，1986，土壌標準分析・測定法．博友社，354p．

(3) まとめ

道祖ノ本遺跡において検出された土坑及び埋甕内の埋土について、花粉・寄生虫卵分析及びリン酸・カルシウム分析を行った。

花粉分析の結果から、遺構の周辺ではソバの栽培が行われていた可能性が示唆される。遺跡周辺にはイネ科を主とする草本類が生育する草地が分布し、さらにその周辺地域には、マツ属複雑管束亜属（アカマツ）の二次林あるいは里山としての造林と、スギの造林が分布していたと推定される。

遺構の用途については、埋甕35は、花粉分析の結果から、ソバ栽培に関連する畑の水溜であった可能性が示唆される。一方、SK 9 及び埋甕14の埋土は、遺構が使用されていた当時のものではなく、放棄された後に急速に堆積した可能性が高い。したがって、トイレ遺構あるいは遺体の埋納といった直接的な遺構の性格を推定することはできなかった。

埋甕35については、リン酸・カルシウム分析で他の2試料よりも高いリン酸・カルシウム濃度が検出されているが、値自体は一般的な土壌の範囲内であることと花粉分析の結果を総合すると、前出の2試料との堆積環境の違いを捉えたものと考えられる。

版 圖



調査区遠景（北西から）

図版 2



調査区遠景（北東から）



調査区全景（北東から）



調査区全景

図版 4



調査区中央部



調査区中央部（北西から）



SK 2 (南西から)



SK 3 (南西から)



SK 7 (北東から)



SK 9 (北東から)



SK 27 (北東から)



SK 31・SK 33 (南から)



埋甕14 (南西から)



埋甕35 (南東から)

図版 6



出土遺物①



出土遺物②

図版 8



出土遺物③

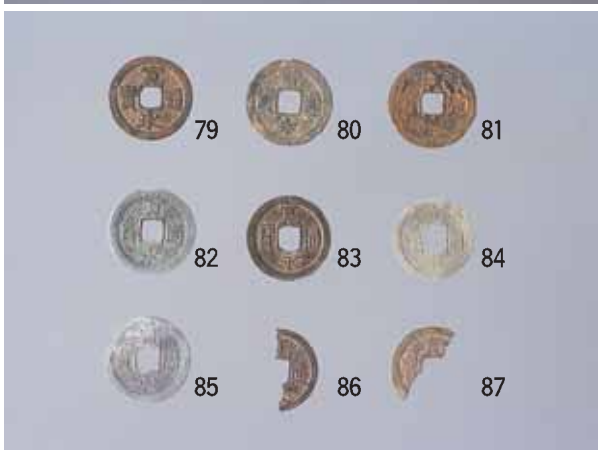
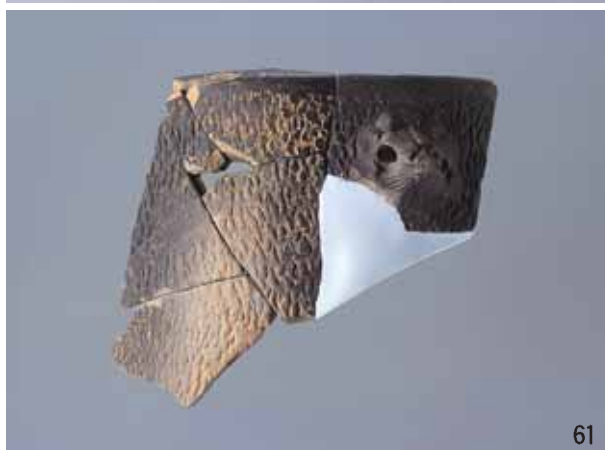


出土遺物④

図版10



出土遺物⑤



出土遺物⑥

図版12



出土遺物⑦

報 告 書 抄 録

ふりがな	どうそのもといせき
書名	道祖ノ本遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第65集
編集著者名	籠山幸雄 小南裕一
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	2008年(平成20年)3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
どうそのもと 道祖ノ本 いせき 遺跡	やまぐちけん 山口県 やないし 柳井市 やない 柳井	35212		33°57'53"	132°08'18"	20070528 20070823	1,500m ²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道祖ノ本遺跡	埋葬跡	近世	土坑 埋甕	陶磁器 石製品 銭貨	近世陶磁器が大量に出土。 土坑数基は墓の可能性あり。

要約	<p>近世の土坑約70基、埋甕2基が検出された。土坑数基は墓坑の上部が削平されたものとも考えられるが、墓と特定できる遺物は出土していない。しかし、南に隣接する地区には五輪塔や古い墓石も散在することから、本遺跡は山麓の南斜面に広がる中・近世の埋葬跡とみられ、今回の調査区はその延長部分にあたると思われる。埋甕は畑として利用されていた時期の水溜と推測される。</p> <p>陶磁器・土器・土製品・石製品・金属製品・銭貨等が出土した。最も出土量が多いのは近世陶磁器である。これらの中には肥前系磁器や萩焼が含まれており、江戸後期の陶磁器流通に関する資料となる。素焼きの管状土錘や寛永通宝も多く出土した。わずかではあるが、中世以前の遺物も確認されている。</p>
----	--

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第65集

道祖ノ本遺跡

2008年3月

編集・発行 財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号
印 刷 泉菊印刷株式会社
〒752-0927 山口県下関市長府扇町8番48号